月刊ナイトバグ　残暑お見舞弾幕進呈型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年 9月号
特集
作品の境界線上を飛ぶ蛍
「東方紅魔郷」
読切り作品
SS　:mimidori/くろと/中国/MR
漫画:角右衛門秋水・けーこーとー/
羅外/東/キッカ/言示弄
連載作品
SS　:Salka/悠奈
漫画:Step/草加あおい/ひどぅん/
クロツク/preudenano/怒羅悪

月刊ナイトバグ　2010年9月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

宵闇に紛れて踊る　イリイチ　……　2p

フラワーマスター様に叱られるから　Step　……　4p～9p

無題　草加あおい　……　10p～11p

ひねもの　mimidori　……　12p～13p

のーとぶっく　中国　……　14p～17p

蟲カゴ～Compensation to fantasy～　悠奈　……　18p～24p

月別テーマ「東方紅魔郷」　……　25p～53p　扉絵：貴キ

-テーマイラスト　……　26p～29p
（やにたま/豆板醤/蛍光流動/モフパカ）

-リグると！　ひどぅん　……　30p

-とーほーこうまきょう　言示弄　……　31p～34p

-東方茶湾虫　クロツク　……　35p～37p

-紅魔抄　キッカ　……　38p～41p

-リグル紅魔を行く　preludenano　……　42p～43p

-ほたりぐる～東方紅魔郷～　怒羅悪　……　44p～45p

-パチュリグな日々～バレンタイン編～　東　……　46p～53p

Summer in a pot　角右衛門秋水/けーこーとー　……　54p～58p

蛍の現象学　羅外　……　59p

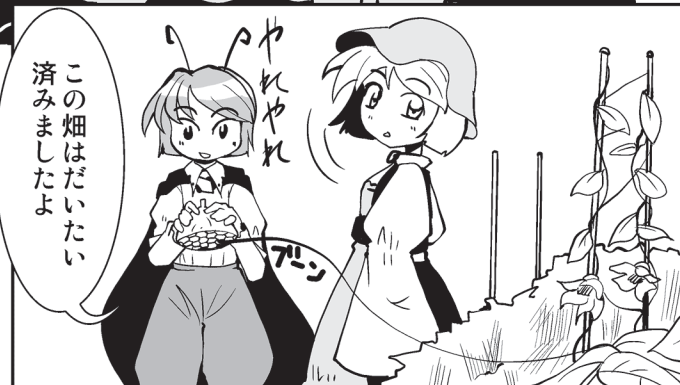
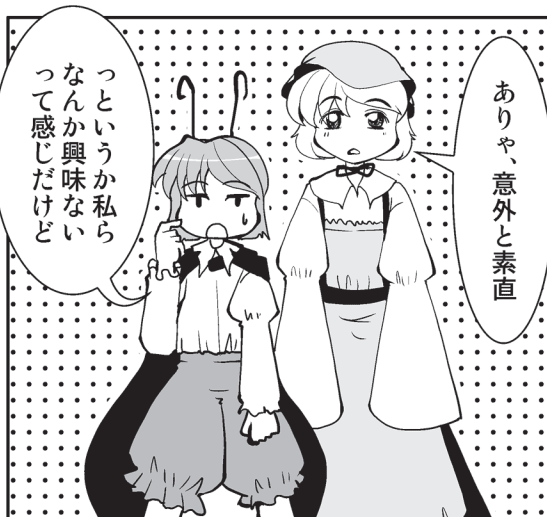
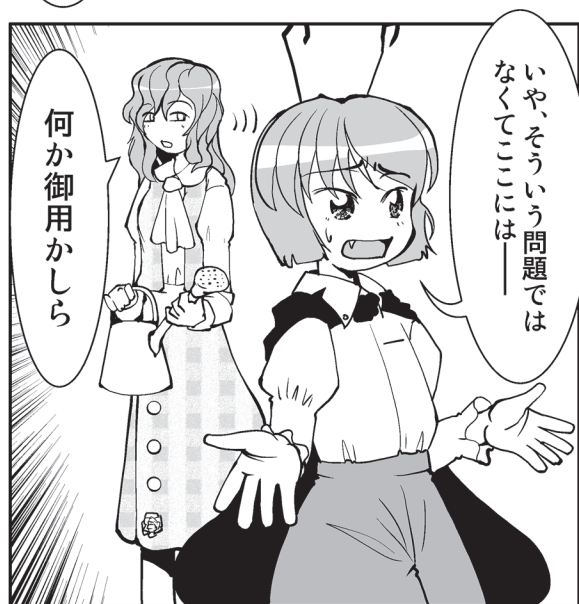
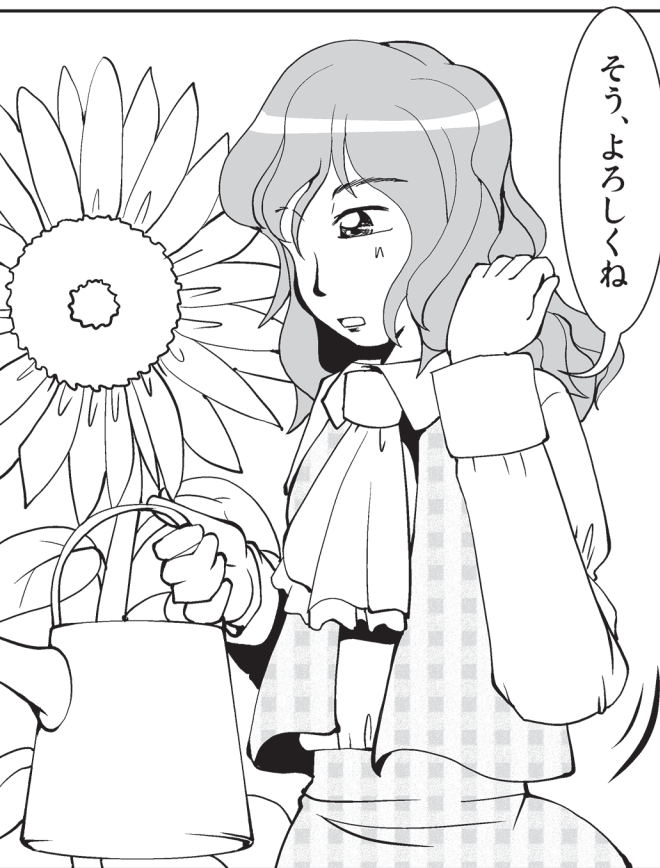
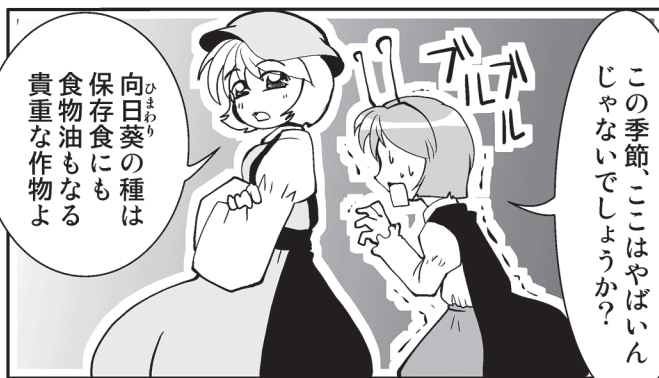
廃校　くろと　……　60p～61p

３Ｄ→２Ｄ　MR　……　62p～69p

東方郵便娘～突撃、異世界からの研究者　Salka　……　70p～79p

漫画、自由作品、表1～表4　作者コメント　……　82p

縁側涼しいね　残虐非道の貴公子　……　83p

葉月だ！夏だ!!
ギラッ
秋の準備の季節であーる
フラワーマスター様に
叱られるから
(Step)
おら、蟲どもは豊穣の秋のためきりきり受粉させせんかーい！
ドッ
穣子さん秋が近づいて元気でてきましたね
秋女神様と呼びなさいッ！
やれやれ
この畑はだいたい済みましたよ
ブーン
ビッ
よし、じゃあ次は反対の畑にいくよ
？
反対の畑？

※虫媒(entomophily):昆虫による受粉(送粉)の事

風見幽香、神社周辺の数ある妖怪の中でも最強クラスとされる妖怪

ガッ

容赦がない恐ろしい妖怪っていうけど……

※ナメクジ（害虫）

あの風見さん、害虫がいたら駆除する前に呼んで下さいね

……その時私の虫の居所がよかったらね

それよりあなたも妖怪なら幽香でいいわ、養蜂家さん

私はリグルと呼んで下さい

——ちょっと雰囲気怖いけど悪い妖怪ではなさそう

気になってたんですが穣子ちゃんなんでそんな偉そうなの？

ボリボリ
おーい、蟲妖(リグル)やまだ終わらないのかね？
ピキッ

イナゴ食ありの神様に蟲妖がたてつこうっていうの？
今年もイナゴが大量発生して欲しいの？
はぁ？
あ？

ババ

ババババ

次はこっちの番だ、いくぞッ！

ギュッ

お待ちなさいリグル
あなたの力はそんな事をするためのものではなくってよ

幽香さん……
グッ

えっ？
ヒュレッ

ゴッ

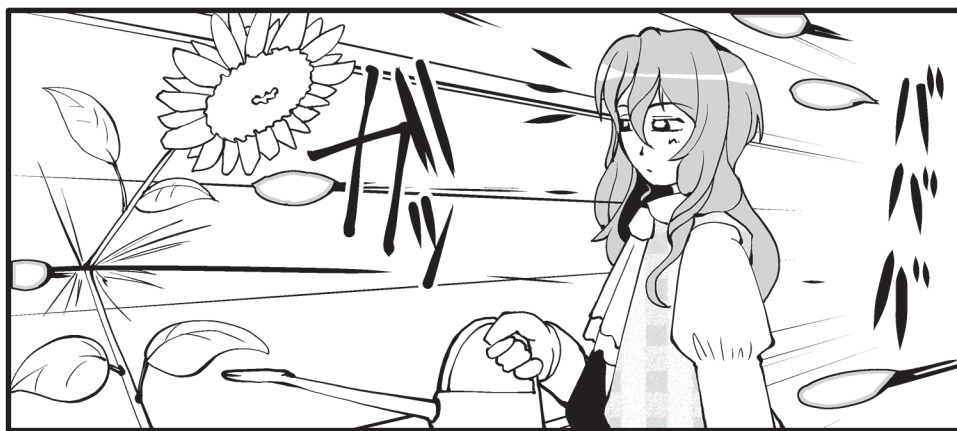
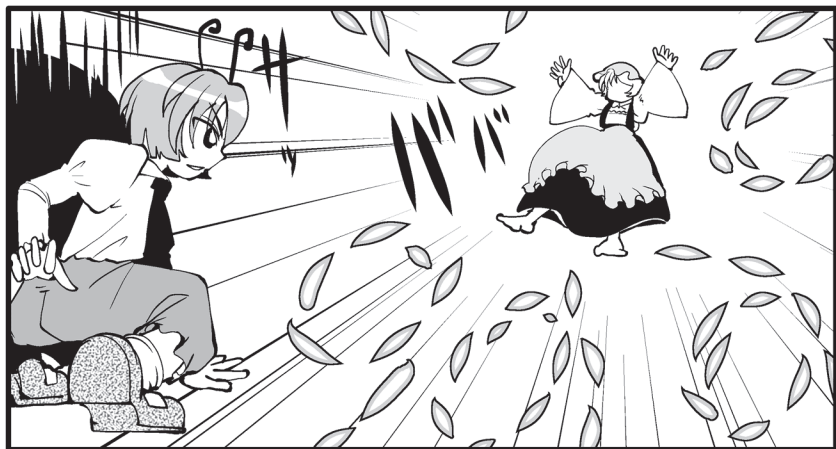
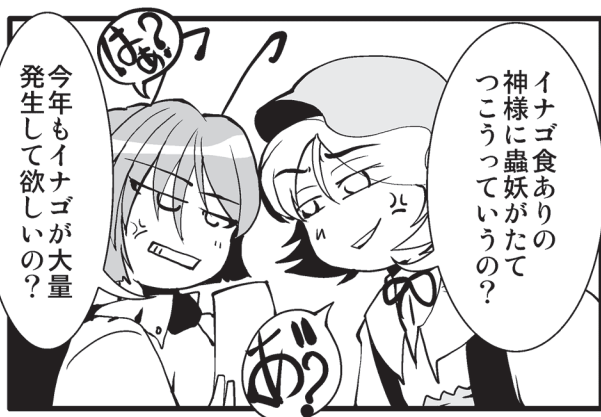
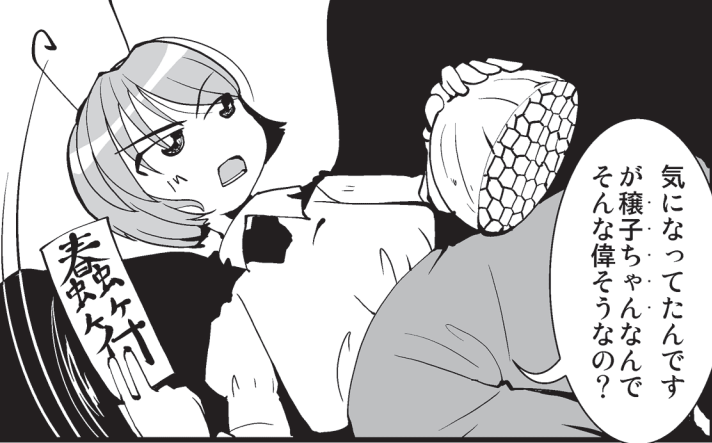
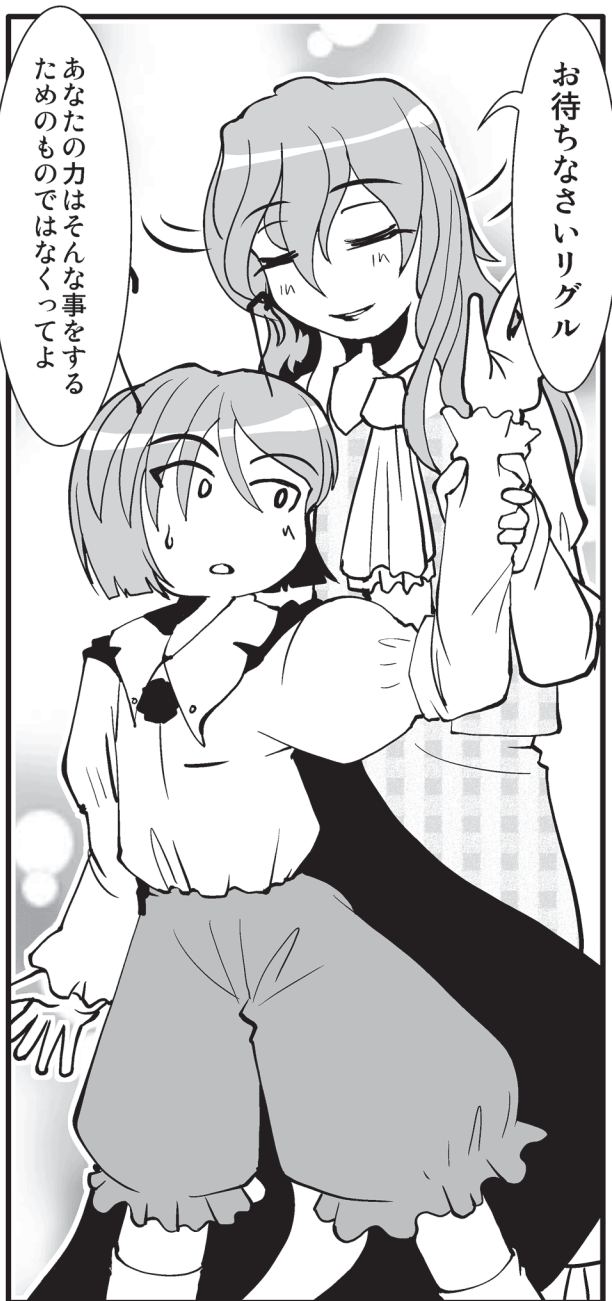
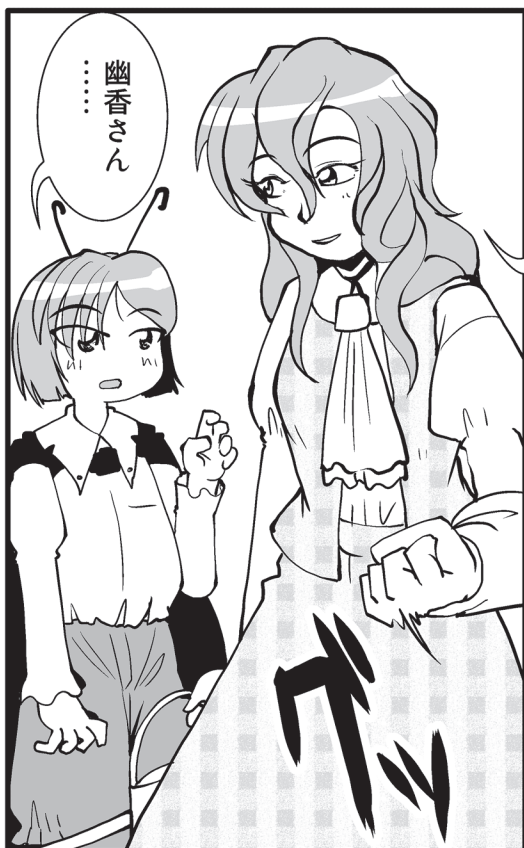
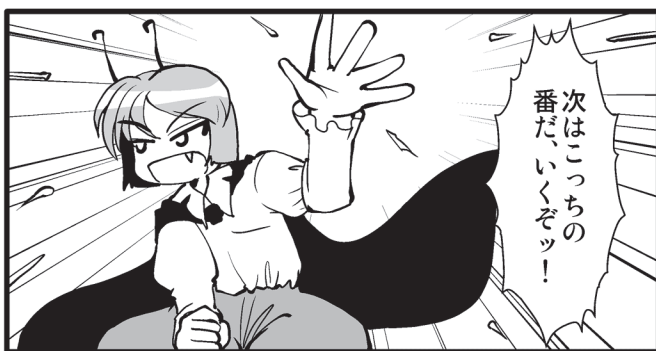
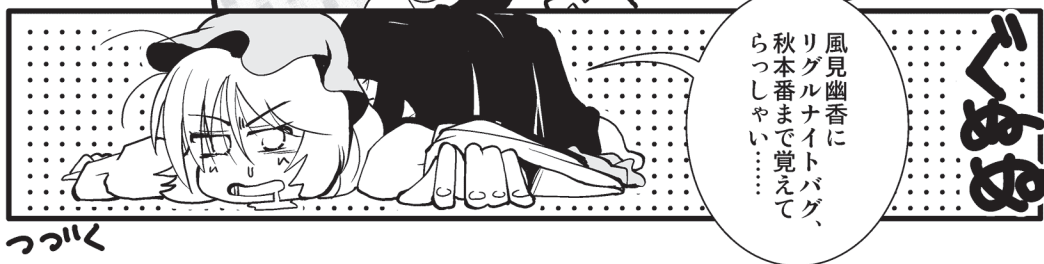
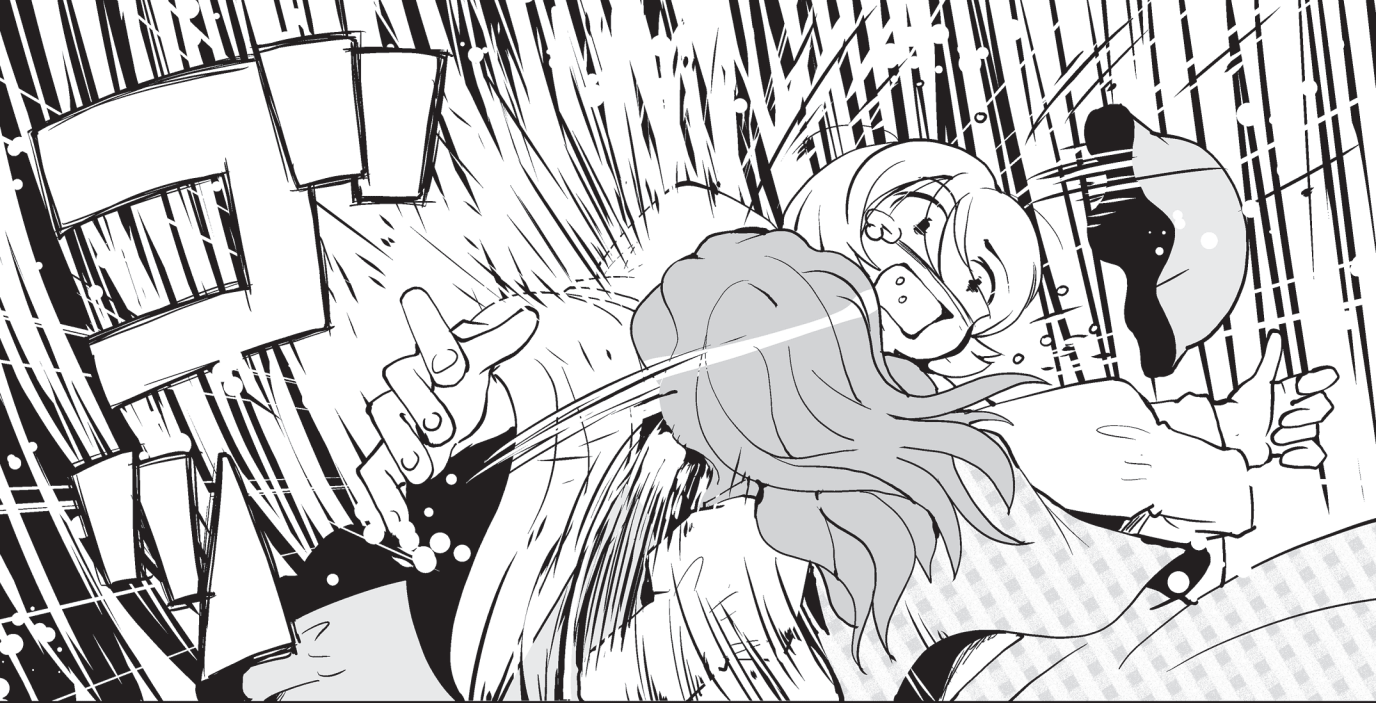
ドサッ

ね、力を使わなくても
素手で、十分でしょう?

はい、これからもご指導よろしくお願いします

ぐぬぬ

風見幽香にリグルナイトバグ、秋本番まで覚えてらっしゃい……

つづく

キュアサンシャインが可愛くて生きたい

楽屋ウラ的何か

描いたヤツ
草加あおい

白くてごめんなさいバージョン

ひねもの

著者：mimidori

蚊帳であった。

どこかの日本のような三〇度を越す暑さは滅多にないものの、やはりきつく刺さるような日差し。それを避けて影へ逃げ込んでも、夏独特の湿り気が不快感を煽る。そこへ蝉の鳴き声と蚊の羽音、虫刺されの痒みときて巫女は限界であった。

「お茶の一杯でも出したげるから」

「この暑いのに淹れたてのお茶なんていらないわよ！」

そっと差し出したお茶は、ずいと返されてしまった。

「第一、蝉は鳴くものだし蚊は血を吸う物なんだから仕方ないじゃない。私には止められない」

持参の竹筒から水を一口飲む彼女は、幻想郷における蟲の王であった。

「ならせめて蚊を近づけないだけでもなんとか。水まんじゅうもつけるから」

「なんでこんな立派な家持ってるのに蚊帳もないのよ……」

兼、交渉上手な巫女の蚊帳であった。

太陽がゆっくりと天頂から下り始める。日の光はますます眩しくなり、空は抜けるように蒼く、その端には遠くに浮かぶ入道雲。ちらりと、外を見て呟いた。

「ひねものが来たわね」

石畳の陽炎に二人の少女が揺らめいた。

「ごきげんよう。どうして素麺を持ってきたって分かったの？」

スカートの端を持ち、きゅっと一礼する姿。透けるように白い肌、豪奢な紅いドレス。コウモリのような黒く禍々しい羽と、人の血の腐ったような匂いさえなければ、どこに出しても恥ずかしくない少女であった。薄く笑った口元に光る、鋭い歯。お天道様の元に出すには恥ずかしい、人の生き血を啜る幻想であった。

「え？お素麺持ってきたの？」

「……ああ、そういうことなのね」

疑問に疑問を投げかけてきた巫女に対し、少女は納得といった仕草を見せた。蟲の少女に出されたお茶を一口飲んで、巫女の食べかけの水饅頭をその小さな口に放り込んだ。

「うん、そういうこと」

団扇の端でスコンと良い音がなった。両目の間、鼻筋を押さえ、畳の上を転げ回る吸血鬼がいた。そんな二人を見ながら触角は二本、宙を彷徨い、蚊取り線香の軌跡を描いていた。ひねもの。素麺。そういうこと。

「どういうことよ……」

「お嬢様はクレナイってことですわ」

未だ外に立ったままの少女が言った。右手に紅い日傘、左手に紅いバスケット。髪に白いヘッドドレス、可愛らしく膨らんだパフスリーブとスカート。その上からエプロンドレスを纏った、いわゆるメイドであった。先程少女が言った通り、バスケットに被せられた紅い布の端からは、真っ白な素麺がちらりと

覗いていた。

「脳がおかしくなりそう……」

　メイドは助け舟を出したつもりだったが、相変わらず蚊取り線香は宙に二つ浮いていた。

「あら？やっぱり虫風情ともなると単純で科学的な思考中枢を持ってるものなのかしら」

　紅くなった鼻柱を摩りつつ、薄く涙を目に溜めた紅が吐き捨てた。その右手は性懲りも無く、また新たに水饅頭へと伸ばされ、今度は中指と薬指の間を団扇の端で叩かれた。右手をかき抱き、呻き声を漏らし、畳の上を転げ回る吸血鬼がいた。相変わらず蚊取り線香は宙に二つ浮いていた。

「難しくて何言ってんだか分かんないけど、馬鹿にされてる気がする……」

「なんでもいいから素麺を寄越しなさい。水饅頭はあとであんたらの分も用意するから」

　団扇でカツ、カツと机を叩く巫女は面倒くさそうに呟いた。時刻は正午を少し過ぎた頃、昼餉には丁度良い時間であった。

「え？あんたにはあげないわよ？」

　当然、といった口調で意地悪く微笑む少女がいた。涙は頬に零れていた。

「クレナイはもう良いからさっさと渡しなさいよ」

「どちらかというとクレアルな気がしますわ」

　主人の涙を、そっと紅いハンケチーフで拭いながら話すメイドがいた。

「ああ、それなら私にも分かる。なるほど、素麺もひねものだったしね」

　ピンと張った触角が二本、素麺のように伸びていた。一人、メイドにされるがままになっている少女だけが、苛立ちを隠そうともせず眉根を寄せ、声に不満の色を露にしていた。

「どういうことよ……」

　蟲の少女が言ったことと同じことを呟いていることにも気づかず、再三、水饅頭をつまもうと手を伸ばした。巫女は団扇を傍らに投げ置いて、お茶を一啜り。空になった湯飲みを盆に載せ、日傘を畳むメイドにおしつけた。立ち上がり、大きく伸びをし、相変わらずいつもの面倒くさそうな調子で巫女は微笑んだ。

「あんたはひねくれものってことよ」

　丁度良く入道雲が頭上を通りかかり、真紅の少女と半紅の少女が空を舞っていた。雲の落とした影の中で様々な形の紅色が飛び交っていた。メイドは盆を持って台所へと消えた。一人残された蟲の少女は、先ほどから変わらず、温くなったお茶を啜っていた。この暑いのによくやる、と空を眺め、先ほどの会話を頭の中で何度も反芻していた。メイドが戻ってくる時に素麺を一緒に運んでくるだろう。リグルは、もう少し知恵をつけようと思った。雲の端から覗いた空は、抜けるように蒼かった。

（終）

あとがき

りぐるんるん　りぐるんるん
ぼくたーちーはー　一生ー　蟄居ーさー
りぐるんるん　るんるん
キック　キック　キック
ひえぇ　ひえぇ　ひえぇ
りぐるのぱんつー

　駄洒落が好きなのでそんな感じになりました。僕にとっての紅魔郷ってホント電波な会話っていう印象だったのです。お前ら日本語使えよ的な。でも神主曰く頭が良いからああなったというじゃないですか。なので僕の思う頭の良い人の、というかユーモアと余裕のある人の会話を目指しました。目指すだけなら誰でも、です。

　現在読者が楽しく遊べるような感じのを画策中です。いつぐらいに投稿出来るか分かりませんが。まぁもし見かけたら遊んでみて下さいな。いつぐらいに投稿出来るか分かりませんが。投稿出来るかすら分かりませんが。

のーとぶっく

著者：中国

〜〜〜紅魔館・地下大図書館〜〜〜

パチュ「はぁ・・・死ねよ・・・」

小悪魔「どうしました？冒頭からいきなり」

パチュ「いや、今机の中を整理してたら昔のノートが出てきてね」

小悪魔「それがなにか？」

パチュ「私さぁ、スペカとかノートに書いて考えるのよ」

小悪魔「すっごい暇な学生みたいですね」

パチュ「でね、これを使ってた当時の私は相当イタい子だったわ」

小悪魔「今でも相当イタい子ですよね、パチュリー様」

パチュ「その時、『そうだ！属性全部混ぜれば強いんじゃね？』的な思いつきをしたのよ」

小悪魔「イタいというより小学生ですよね」

パチュ「それで生まれたスペカが・・・」

小悪魔「『賢者の石』という訳ですか」

パチュ「で、そんな自分を思い出して、思わずね・・・」

小悪魔「そうですか。長々と説明ご苦労様です」

パチュ「という訳で、このノートの処分をお願いするわ」

小悪魔「了解です」

パチュ「さらば、私の黒歴史・・・」

小悪魔「ところで、パチュリー様」

パチュ「何？」

小悪魔「パチュリー様、説明下手ですね」

パチュ「うっせぇ！さっさと行け！」

〜〜〜5分後、紅魔館・廊下〜〜〜

小悪魔「処分っていってもどうすればいいのでしょうか・・・」

小悪魔「まぁ、屋上あたりから投げればいいですよね」

〜〜〜紅魔館・屋上〜〜〜

小悪魔「そぉい！」

小悪魔「うん、凄い勢いで飛んで行きましたね。任務完了です」

〜〜〜天子の家・居間〜〜〜

天子「暇よね・・・何か無いかしら」

衣玖「一緒にフィーバーしませんか？」

天子「却下。何言ってんのよ」

衣玖「面白いかと思いまして」

天子「いや、それはないわ」

ヒューン・・・・・・

天子　「今何か聞こえた？」
衣玖　「いえ、別に何も」

ヒューン・・・・・・

天子　「やっぱり何か聞こえるわよ」
衣玖　「ちょっと外見てきましょうか？」
天子　「じゃあ、私も」

〜〜〜天子の家・庭〜〜〜

天子　「何も無いわね」

ヒューン・・・・・スコン！

衣玖　「ぐぅはっ！」
天子　「きゃー！衣玖？イクぅ！」
衣玖　「全く・・・いい人生だった・・・」
天子　「ちょ、逝くな！」
衣玖　「というのは冗談です」
天子　「ごめんちょっと意味分からない」
衣玖　「面白いかと思いまして」
天子　「そういうネタは笑えんから注意しとけよ」
衣玖　「サーセン」
天子　「で、何なのよ、これ」
衣玖　「ノート、ですね。どう見ても。しかもかなり古い」

天子　「嫌な予感満載なノートね」
衣玖　「とりあえず読みましょうか」
天子　「衣玖？」
衣玖　「何ですか？」
天子　「人のノート勝手に読んじゃ、めっ！」
衣玖　「えー・・・そりゃないでしょう・・・」
天子　「ダメなものはダメ。常識的に」
衣玖　「ちぇっ、分かりましたよ。・・・そぉい！」
天子　「投げんな！何故投げる！」
衣玖　「面白いかと思いまして」
天子　「お前いい加減うざいんですけど」
衣玖　「人にうざいとか言っちゃ、めっ！」
天子　「これもうぶった斬っていいよね？イイヨネ？」
衣玖　「ところで、総領娘様」
天子　「何よ」
衣玖　「いつまでこのタルい漫才続けるんすか？」
天子　「・・・」

ぷちっ↑何かが切れた音

衣玖　「・・・？」
天子　「・・・」

シャキン！↑何かを抜刀した音

衣玖　「・・・！」

天子　「ねぇ、衣玖。」
衣玖　「な、何ですか？」
天子　「テメェは私を怒らせた・・・」
衣玖　「ちょ、ま、危ないですよ！」
天子　「問答無用。覚悟！」
衣玖　「ちょ、謝りますから！命だけは！」
天子　「ちっ、仕方ないわね」
衣玖　「スキ有り！そぉい！」

キラッ☆↑剣が星になる音

天子　「あっ！私の剣が！」
衣玖　「大気圏外に放り出してみました♪」
天子　「『みました♪』じゃねぇよ！どうすんのよ！」
衣玖　「さぁ？引力に引かれて下界にでも落ちるんじゃ？」
天子　「『さぁ？』って・・・。まあ後で拾いに行くわ」
衣玖　「あ、言い忘れてましたけど、あの剣が落ちると下界は滅亡します」
天子　「な、何だってー！」
衣玖　「そりゃ、あの剣軽く刺さっただけで宇宙まで突き上げられますし」

※東方緋想天『全人類の緋想天』参照。

天子　「幻想郷オワタ」
衣玖　「そんな訳であと十分で滅亡しま

す」
天子　「何という急展開」
衣玖　「まぁ、仕方ないでしょう。いろんな意味で」
天子　「どうするのよ。まじで」
衣玖　「まぁ、どうしようもないです」
天子　「じゃあ、仕方ないわね」
衣玖　「そうですね」
天子　「by the way, さっきのノートは?」
衣玖　「さぁ?」

〜〜〜博麗神社〜〜〜

魔理沙　「おう、霊夢遊びに来たのぜ」
霊夢　「一応言っとくけど、ここ神社だからね?遊び場じゃないからね?」
魔理沙　「そんなこと言いつつお茶持ってくる霊夢萌え」
霊夢　「あー、ハイハイ。良かったわね」
魔理沙　「全く、つれないなぁ。霊夢は」
霊夢　「いちいち付き合ってたら身が持たないわよ」
ヒューン・・・・・・
魔理沙　「ま、それもそーだな」
霊夢　「分かってんなら言わないでよ・・・」
ヒューン・・・・・・
魔理沙　「何か音しねぇ?」
霊夢　「そういえばそうねぇ」
ヒューン・・・・・・スコン!
霊夢　「痛っ!」
ぴちゅーん!
魔理沙　「なんてこった!霊夢が死んじゃった!」
霊夢　「もう、無駄に残機減らしちゃったじゃない。何なのよ」
魔理沙　「ノートだろ。流れ的に」
霊夢　「流れ?」
魔理沙　「こっちの都合だ。気にするな」
霊夢　「ふぅん・・・。まぁいいわ。で、何のノートよ」
魔理沙　「さぁな。私の場合、学生の頃はノートといえば落書き帳だったが」
霊夢　「いや、勉強しろよ」
魔理沙　「勉強はパワーだZE☆」
霊夢　「便利よねその定型句」
魔理沙　「若干古くなってきた気はするがな」
霊夢　「で、どうすんのよ、これ」
魔理沙　「youどうする?読む?読んじゃう?」
霊夢　「うわぁ・・・うっぜぇ・・・・」
魔理沙　「それで、読むのか?読まないんなら、捨てるぜ」
霊夢　「じゃあいいわ。面倒そうだし」
魔理沙　「了解。いくZE!恋符『マスタースパーク』!」
じゅっ!↑灰になるノート
魔理沙　「弾幕はパワーだZE☆」

〜〜〜5分後〜〜〜

魔理沙　「終わったな・・・」
霊夢　「ええ、終ったわ・・・」
魔理沙　「最後・・・すっげぇ雑だったな・・・」
霊夢　「ノートも見てないしね」
魔理沙　「あれは、本来読むべきだったよな・・・」
霊夢　「まぁ、そうでしょうね」
魔理沙　「でも、もう過ぎた事だし」
霊夢　「仕方ないわね」

ちなみに。

〜〜〜五分前・博麗神社上空〜〜〜

ヒューン・・・・・・↑剣の落下音

〜〜〜五分前・博麗神社〜〜〜

魔理沙「了解。いくZE！恋符『マスタースパーク』！」

〜〜〜五分前・博麗神社上空〜〜〜

じゅっ！↑マスパで蒸発した剣

・・・こうして、幻想郷の平和は守られたのであった・・・

〜〜〜最後に〜〜〜

リグル「やっと出番だよ・・・」
幽香「まぁ、もう本編は終わってるけどね」
リグル「な、何だってー！」
幽香「という訳で本編の反省をしていくわ」
リグル「これは酷い、で片付くよね」
幽香「最後とかね」
リグル「あれを『落下中の緋想の剣が魔理沙のマスパに命中して蒸発した場面』と理解できる人、居るのかな？」
幽香「さぁ？例え居なくてもそれは作者の所為で、私達の所為じゃないし」
リグル「それもそうだね」
幽香「ところで、りぐるん」
リグル「何？ゆうかりん」
幽香「もうすぐ終わりみたいよ」
リグル「・・・まじで？」
幽香「まじで」
リグル「・・・」
幽香「・・・」
リグル「お願いします！私にもっと出番を！」
幽香「だ　が　断　る」
リグル「そ、そんなぁ」
幽香「素直に諦めなさい」
リグル「・・・でもさ、ゆうかりん」
幽香「何？」
リグル「この会話、反省になってないよね」
幽香「そりゃ、まぁね。それじゃ終わり」
リグル「ここまで読んで頂いた皆様、ありがとうございました」

（終）

〈作者コメント〉

※コメントなし

蟲カゴ

～ Compensation to fantasy ～

著者：悠奈

夜の森をただフラフラと一人の少女が歩いていた。行くあてもなくただひたすら歩き続けている。少女、リグル・ナイトバグはミスティアの魂を吸収した後、自分の身のある違和感について考えていた。

――身体が暖かい、何だか心地よい

暫くリグルの全身を病みつきになりそうな暖かさが包み込んでいた。まるでもっと他の者も殺し、吸収しろ。と言わんばかりに。

謎の暖かい心地が止んだ後、リグルはうつろな眼で立ち上がり、放浪して今に至る。

(ミスティア……チルノ……)

リグルの頭の中では二人の少女の姿で一杯だった。わけのわからないまま死んでしまったミスティア。そしてその様子を見たチルノ……。

(違う……私はミスティアを殺してない)

リグルは立ち上り首を横に振る。

(そうだ、私はミスティアを殺していない。殺すものか!それを、それをチルノに誤解されてしまったんだ……)

リグルは空を眺める。雲一つ無く、綺麗な星空と満月が見えた。リグルは腕を上げ、月に向かって突き出す。そして開いていた拳をぎゅっと握りしめる。

(チルノにあって、謝らないと。そして事実を伝え、皆で協力してこの異変を解決し、生き残るんだ)

上げていた腕を降ろし、じっと見つめる。その瞳には先ほどのような虚ろな様子は無く、生に溢れ、決意に満ちていた。そしてリグルは再び歩き始めた。

◇

暫く歩くと何処かで見た風景に辿り着いた。蟲はあまり頭が良く無い為なかなか思い出せないが、リグルは一生懸命に思い出す。

「えっと……そうだ、ここは確か人間の里の近くだ」

幻想郷にある人里。ここでは危害さえ加えなければ、妖怪が出入りしても問題の無く、リグルも何度か足を運んだ事があった。以前チルノやミスティア、そして宵闇の妖怪ルーミア達と一緒に悪戯をしていたのを覚えている。しかし、今やそのミスティアは――

リグルは首を振って考えていたことを必死に忘れようとする。

(ダメだ。今ミスティアの事なんて思い出したら……)

自然と眼に涙が溢れてくる。目の前で死んでしまったミスティアにもう会えないと思うと涙が止まらない。拭っても拭っても止まらない。際限無く溢れる涙を拭く度に顔がグシャグシャになる。

暫くリグルは泣いた。涙は枯れることなく流れ続けているが、真っ直ぐ前を見つめる。

(きっと、これが異変ならきっと解決法があるはずだ。だから、私が解決したらミスティアを助けられるかもしれない。ならば、泣い

てなんていられない。私がしっかりしなくちゃ）
　リグルは涙を流しながら前に、人間の里に向かって歩き出した。そこには知識人の上白沢慧音が居る事をリグルは知っていた。知識人である彼女ならこの異変が何なのか知っているかもしれない。それに、解決法、ミスティアを救う方法がわかるかもしれない。そう考えたリグルは真っ直ぐ人間の里へと歩み始めた。

◇

　静かだった。夜の人里についたリグルは異様な静けさを感じていた。妖怪と違い人間は夜あまり行動をしないことはリグルも知っていたが、あまりに静かすぎる。この静けさはあまりに異常だった。まるで――
（人の気配を感じない……？）
　近くにある民家の戸に手をかける。人が中で寝ているのならば、戸締りをしているはずだが、戸は難なく開いた。リグルはおそるおそる室内に入り、調べるが、何処にも人の姿は無い。他の民家も調べてみるが、どれも同じように人が居ない。
（おかしい、どうなって……）
　人里を歩きながらそう思っていると、足が何かを蹴る感触を覚える。リグルはそれを拾い、月明かりに照らして見てみると、丸くて真っ白で、中は空洞になっている。それは――
「ひ、ひぇぇぇ」
　頭蓋骨だった。リグルは驚きのあまりソレを落とす。ソレはコロコロと転がっていったが、離れた所で止まった。ソレはまるでこちらを見て笑っているかのように見えた。
「な、なんでこんなものが……一体何が？」
　あたりをよく見てみると、遠くに何かが山積みにされているのが見えた。おそるおそる近づいてみると、それが何なのかわかった。
「……」
　リグルは声も出なかった。そこには山積みにされた人骨があったからだ。自分の背丈の二倍はある山、それが骨だけで構成されていた。
　その頂に人影が見えた。山に近寄りその姿を見る。頭に二本の角があり、淡い緑色の長髪。以前、慧音は満月のよるに妖怪になると聞いたことがある。聞いた特徴とこの人物は合致する。
「慧音……？」
　おそるおそる声をかけてみるが、聞こえていないようで見向きもしない。良く見てみると慧音が何かを呟いているのがわかる。人だったモノを踏む事には抵抗があったが、リグルはおそるおそるその山を登る。
「……ことに……なかった……」
　慧音に近づくにつれて呟いている内容がはっきりとしてくる。
「無かった事に、無かった事に――」
　はっきりと聞こえた。慧音はずっと同じ単語を繰り返して呟いている。その手には一つの頭蓋骨が抱えられ、うつろな瞳でじっと眺めていた。
「……」
　その様子を見て怯えたリグルが一歩下がると、足があたっていくつかの骨が山から崩れ落ちた。その音で慧音がこちらに気付く。
「け、慧音」
「妖怪……また来たのか、これ以上、これ以上里に被害は出させんっ！」
　慧音は持っていた骨を置き、立ち上がる。そこには寺子屋で見せる穏やかな雰囲気は一切感じられず、殺気が膨れ上がっていた。
「慧音！私だよっ！前に色々教えてもらった妖怪の……」
「失せろっ！妖怪め！」
　リグルの言うことに聞く耳を持たず、慧音は爪を立てて飛び掛る。
「ぐっ！」
　リグルはとっさに横に飛ぶ、不安定な山に上手く着地することができず、山から転げ落ちる。慧音もリグルが居た所でバランスが取れず地面に転げ落ちる。
「慧音！どうしたの！何があったの！？」
　リグルの問いかけに慧音は答えない。ゆっくりと立ち上がりリグルを睨みつける。その眼光の鋭さにリグルはビクッと震える。その隙を逃さず慧音が頭から突進する。
（しまった！）

リグルがそう思った時には既に慧音の角がわき腹に直撃していた。
「かはっ……」
　小柄な体つきのリグルは、慧音の攻撃に耐え切れず地面に投げ出される。
「くっ……」
　角が刺さり、流血し、痛む体を押さえつつ、顔をあげる。リグルの目の前にはこちらを睨みつける慧音の顔があった。慧音は何も言わず爪をたて、リグルの顔に向けてふりおろした。やがて来るであろう激痛に恐怖し、リグルは眼を瞑った。
（チルノ……ごめん。ミスティア、私もそっちに逝くのかなぁ）
　その時、眼を瞑っていてもわかるような光が発生した。
「ぐあぁぁぁぁ！」
　光と同時に慧音の苦痛な叫び声。おそるおそる眼を開けると目の前にいる慧音の背中が赤く光り、熱気を帯びていた。
「馬鹿っ！何ボサッとしてる！早く立て。」
　リグルの横から発せられる声、その方向を見てみると人が居た。この人は――
「もこう、さん……？」
　藤原妹紅、不死の身体を持つ人。慧音とは仲が良い方で、以前会ったこともある。長年生きていたからか、妖術で炎が操れるとか。
「ということは……」
　リグルは地面に手をつき、痛む身体に鞭打ち、なんとか立ち上がりながら慧音を見る。赤い光、それは全てを飲み込む炎の光だった。
「急げっ！慧音ならあれくらいすぐ消しちまう」
　妹紅に手を掴まれてリグルは慧音とは反対方向に走って逃げる。
「ぐあぁぁ、妖怪めぇ！よくも、よくも皆を！あぁぁぁぁ」
　逃げながら背中で慧音の叫びを聞く。リグルは振り返り慧音を見る。そこには炎に焼かれながらもがき苦しみ、暴れる姿があった。あまりの惨劇にすぐ妹紅の方を向き、リグルは走り続けた。
　静かな人里に一人の半妖の叫び声が木霊した。

◇

「大丈夫か？」
　二人は骨の山から離れた民家に隠れていた。暗い室内を先程妹紅が戸棚から拝借した蝋燭が照らす。リグルは出血した状態で走っていたため、かなり疲労していた。
「大丈夫です。生きてます。一応これでも妖怪ですから、そう簡単には死にません……」
　リグルは強がってみせているが、その声に力は無い。
（私のリボンをあてて止血はしているが、怪我の手当てはしてないしな……）
　妹紅はリグルを見る。壁にもたれかかって座り込んだ小さな身体。白い服には赤い染み。顔には疲労の色が表れ、汗をかいている。痛みを抑えるためか、眼を瞑って呼吸も荒い。彼女の特徴である触覚も心なしか力無く垂れているように見える。
「リグル、ちょっと待ってろ。この家で何か治療出来る物が無いか調べてみる。」
　そう言って妹紅は立ち上がり、襖を開けて中を物色し始めた。
「紅妹さん……」
　リグルの口が微かに動き、小さな声を発する。
「どうして、どうして私を助けてくれたんですか？今の私なら簡単に消す事が出来るのに……」
　リグルが眼を開け妹紅をまっすぐ見つめて言う。
「……私は今回の異常な事態の中での被害者を出さないようにして解決したいと思っている。だからリグル、あんたを殺さない。」
　妹紅はリグルの言葉を背中で受け止め、背を向けたまま返事をした。
「昨夜の宴会の後、何時もどおり酔い醒ましに輝夜のヤローと殺りあったんだ。そしたらさ、アイツ一回は普通にリザレクションしたくせに、二回目殺ったら動かなくなっちまった。」
　声のトーンを変える事なく、ガサガサと音を立てて襖の中を調べながら語り続けた。
「お互いが殺しあうことで、私達は死を感じ

ると同時に生を感じていたんだ。死んだから生きていた。生き返ったから死んでいた。ごく当たり前の事だが、不死の身となった私達にとってはそれだけが楽しみだったのさ。なのに……あいつは二度と生き返らないし私を殺してくれなくなっちまった。」

　妹紅の声が徐々に震えていた。リグルは黙って妹紅の話を聞いている。

「輝夜の亡骸を抱えていたら、あいつ光の球になっちまってな。あろうことか私の身体の中に入りこんできたよ。その時妙に心が暖かかったのを覚えている……だがな、それと同時に心細さも感じたよ。その時気付いたのさ。なんだかんだ言いながら私はヤツを憎んでない事にな。その時にはアイツはいなくなっちまったけどな……」

　外から風が入ってきた。夜の涼しい風。傷を負い、熱を持っていたリグルの身体を冷やしてくれる心地よい風。その風が蝋燭の灯りを揺らす。風になびく灯りの中で妹紅が腕で眼元を擦っているのがリグルには見えた。

「その後、何も考えれずボーッっとしていると、ヤツの従者に会った。状況を把握したアイツらは私を殺そうとしてきたが、逆に私が殺していた。その後もウサギ共が次々に復讐の為私を殺そうとしてきたのを覚えている。気がついた時には私の手は真っ赤で永遠亭の住民も皆殺しにしていた。」

　妹紅は襖から何個か箱を取り出しては開けて中を覗いていた。

「未だに私が殺したやつらの顔が脳裏に浮かぶ……こんな辛い思いはもうしたくない。だから出来るだけこれ以上の被害者を出すこと無く、話し合いが通じれば協力して異変を解決する。そして、この馬鹿みたいな異変で死んじまったやつを何とかできないかと考えているんだ。その為知恵を借りようと慧音に会いに来たんだが、あの様子じゃ話し合いも無理だな………これで全部か。運がよかったな、ここは医者の家らしく、色々な薬草があるぞ。」

　そう言って何もなかったかのように振り向く妹紅。その眼は少し赤くなっていた。妹紅は持ってきた箱をリグルの横に置き、リグルの上着を脱がせ、止血の為にあてていたリボンを外す。

「思ってたより深いな……」

　妖怪だから丈夫だとはいえ、鋭利な角を思いっきり刺されているのだ。傷が浅いわけがない。妹紅は蝋燭で傷口を照らして見る。

(これは、酷いな。よくもまぁこの状態で走れたもんだ……)

　妹紅はリグルの顔を見る。先程よりも辛そうな表情が見える。痛みをこらえるためか、眼をギュッと瞑っている。

「リグル、大丈夫だ。傷に良く効く薬を今煎じてやる。」

　妹紅は薬草の入った箱から何種類かの薬草を選別して、畳の上に並べはじめた。

「妹紅さん。薬なんて作れるの……?」

　リグルの口から心配そうな声が漏れる。妹紅は薬草を選びながら答える。

「うんにゃ、作れない。だが、何故か今は薬の作り方が頭に浮かぶんだ。それも、細かい分量までわかる……」

　妹紅は選んだ薬草をすり潰して鉢の中へ入れ、時々水を入れながら全てを混ぜ合わせる。

「不思議な感じがする。私の中に他の何かが居るような感じがして……そいつに指示されているかのような気分だ……」

　リグルは眼を開き、妹紅を見る。リグルはそこに妹紅の気配と一緒に、永遠亭の薬師の幻影が見えた。妹紅の背中で妹紅とまったく動きをしている様子が見えた。

「これで、たぶん出来たはずだ。沁みるだろうが我慢してくれ」

　妹紅がリグルの前に座り込みながら言う。その時には既に薬師の幻影も気配も無かった。妹紅は、包帯に先程作った薬を塗り、傷口に当てる。

「っ－！」

　想像以上の刺激にリグルが顔をしかめる。

「我慢しろ。良薬は苦いもんだ」

　薬付きの包帯を巻いた後、その上から更に普通の包帯を巻きつけて固定する。

「これで大丈夫なはずだ。暫くしたら傷口もふさがるだろう。」

　リグルに服を着せながら紅妹は語りかける。

「妹紅さん……さっき貴女の背中に――」
　リグルが全てを言い終わる前に民家の玄関が激しい音を立てて壊れた。二人が同時に玄関の方を見ると、息を荒立てた慧音の姿があった。
「よくもぉぉぉ、妖怪共、村の皆をぉ」
　慧音が二人の姿を見つけ、ギロリと睨む。その瞬間、妹紅が慧音の前に火柱を立てる。慧音はいきなり目の前に表れた強い光に視界を潰されて怯む。その隙にリグルの手を掴み、慧音の脇を走りぬけて逃げる。
「くそっ!よりによってなんで今日が満月なんだ。里のあの様子でただでさえ精神が不安定なのに、妖怪化して理性が保てなくなってやがる。」
　妹紅が走りながら悪態をつく。
「満月……!?ね、ねぇ妹紅さん、ちょっとまって!」
　リグルがハッとして先導する妹紅に話しかける。それを聞いて妹紅は立ち止まりリグルの方を向く。
「おかしいよ!確か一昨日も満月だったよ!?」
「なんだって!?それは確かなのか!?」
「うん。一昨日湖の館で満月って事でパーティを開いていたんだ。だから覚えている。だから今日も満月なんておかしいよ!」
　二人は空を見上げる。そこには綺麗な丸い形をした月がこちらを見下ろしていた。
「少しも欠けていない……どうなっていやがる!?」
「わからない……でも、今回の異変同様にだれかが何か細工している事は確かだよ。」
「くそっ!一体誰か何の目的でこんなことを……」
　妹紅が悔しさをぶつけるように民家の壁を思いっきり叩く。
「……もしかしたら、仕向けた犯人が、幻想郷中の人々を戦わすように仕向けた犯人が、妖怪の本能を呼び起こすために満月を空に留めているのかもしれない。」
　妖怪は満月の夜が一番妖力も高まり、活発になる。
　以前終わらない夜が続いた時も満月で、リグルは己の妖力が高まっていたのを感じていた。その事もあり、今回の異変も同様に誰かが夜、ではなく月を固定しているのかもしれない。とリグルは考えたのだ。
　そしてこれは今回の異変、争いを促進させるのに満月は恰好な材料となる。
「狂ってやがる……と言うことは、異変を解決しない限り月も戻らないし、慧音もあのままなのか!」
　妹紅がそう言った次の瞬間、先程まで二人が隠れていた家が音を立てて崩れ、砂埃が宙を舞った。その中からゆっくりと慧音が二人の居る方向へと歩いてくる。
「……リグル。隠れていろ。慧音は、私がこの手で苦しみから解放する。」
　リグルの前に立ち、妹紅は慧音を睨みつける。
「そ、それって、妹紅さん。まさか慧音さんを――」
「満月が続くようじゃそれしか手段が無いんだ!だから……せめて私の手で――」
　妹紅が全て言い終わる前に慧音が二人に向かって突進してきた。
「っ!」
「早く行け!リグル!」
　リグルは走って近くの民家の陰に隠れ、二人を覗き見る。
　正気を失った知識人とその友人である不老不死者が夜の人里に対峙した。
「慧音、すまない。何があったかは知らないが、話しも出来ぬ状態ならば……」
　妹紅は慧音に向かって腕をつきだした。
「こいっ!せめて私の手でその妖怪の血の苦しみから解き放ってやる。」
　慧音と妹紅が衝突する。リグルは思わず目をつぶる。
　妹紅の手はしっかりと慧音の鋭利な角を捕らえていた。慧音がその束縛から逃れようと暴れるが、妹紅はまっすぐ前を向いてその手を放そうとしない。
「……」
　妹紅は視線を落とし、無言で慧音を見つめる。慧音の眼は憎しみに満ちており、妹紅の姿は映っていない。
　妹紅は慧音の角を握っている両手に意識を集中させる。慧音はもがきつづけているが妹

紅は力を緩めない。妹紅の両手に妹紅の全身に溢れる妖気が集い、熱気を帯びる。次の瞬間妹紅の両手から爆音と共に火柱があがった。

「グ、ガァァァァ！」

　慧音はあまりの熱気に更に暴れるが、妹紅は決して離そうとしない。

「けーねぇぇ！」

　慧音が暴れて鋭い爪が妹紅の体を切り裂き、頭を激しく揺らす度に角を持つ妹紅の手の平の皮が摩擦で傷つく。

「グ、ガァ！グガァァァァ！！！」

　角から顔へと炎は燃え移り、慧音の髪を燃やす。髪の燃える異臭が隠れているリグルの元にも届く。リグルは咄嗟に手で鼻を隠し、燃えつづける慧音を見つめる。

　ついに炎は慧音の全身を包み込んだ。真っ赤な炎の中に見える人影、そのおぞましい光景にリグルは思わず眼をそらしてしまう。

　炎が全身を包み込んで数秒と経たぬ内に慧音の動きは止まった。妹紅が支えている角から下、全身をだらりと垂らした状態で静止している。その様子を見て妹紅は慧音を纏っていた炎を両手へと吸い戻し、消す。

「……」

　妹紅は無言で慧音を地面に降ろす。慧音はピクリとも動かなくなった。

◇

　リグルは動けなかった。自分の良き理解者でもあり、友人の慧音をやむを得ないとはいえ、燃やしてしまった妹紅に何と声をかければよいかわからなかった。暫くして、リグルは妹紅の元へと恐る恐る歩いていった。その時リグルの眼に映った慧音はすっかり変わり果てていた。髪は真っ黒に焦げ、服もほとんど焦げて肌が見えていた。その肌も火傷だらけだった。妖怪の象徴であった角はもう見えない。

「けーね……」

　リグルはそのあまりの状況に身体を震わせ、地面に膝をついて慧音を見つめた。

「慧音……すまない。でも、こうでもしないとお前は妖怪のまま苦しみ、意識を取り戻さなかった。」

　妹紅が慧音の手をぎゅっと握り締める。その手が妹紅を握り返した。

「っ！？」

「も……こう」

　妹紅がはっとして慧音の顔を見ると、人里でみる優しい眼が妹紅を見つめていた。

「け、慧音！生きて――」

「妹紅、迷惑を……かけたな」

　ゆっくり震える声で慧音は妹紅に話かける。

「慧音さん！喋らないで！貴女は体力を消耗して――」

　リグルが言い終わる前に妹紅が手で制す。リグルは妹紅の顔を見るが、妹紅は慧音を悲しい目で見つめていた。その時リグルにはわかった。慧音がもう助からないのは攻撃をした妹紅がよく知っている、そして何より彼女が一番辛い思いをしている事が。

「私が……里に帰ったら既に里の者はいなくなっていた……。それを見て、私の中で……何かが弾け飛んだ。気が付いたら、皆の骨を集めて……ゴホッ」

　慧音が咳き込み、口から赤い液体を吐きだす。無理もない、妹紅の炎の熱は慧音の体内をも焼き、焦がしていた。

「ゲホッ……妹紅。すまなかった……後は、後はお前達が……」

　妹紅の手を握っていた慧音の力が弱まる。

「慧音！！」

　妹紅が大声で呼びかける。慧音は妹紅に微笑みながらゆっくりと眼をつぶる。

「もこう……人里で……皆と同じ姿で死ねて私は嬉しい……」

　妹紅の手の平からするりと慧音の手が滑り落ちた。リグルは下唇を噛みしめ、拳を握り眼をつぶっている。その時、慧音の口が微かに動いたのを妹紅は見逃さなかった。妹紅は咄嗟に耳を慧音の顔に近づけた。

「……くまがくる。紅い……悪魔が。にげ……」

　妹紅がそれだけ聞き取ると、慧音の身体が光に包まれ――

◇

「慧音……」
　妹紅が自身の胸に手を当て、眼をつぶり、今や自分と同じ身体を持つ慧音の魂に黙祷を捧げる。リグルは黙ってそれを見届ける。
「……リグル。犯人を見つけよう。そして、そいつを思いっきり殴り倒してやろう！」
　グッっと力強く妹紅は拳を握り、リグルに笑いかけた。リグルもそれに笑って答える。
「はいっ！」
「誰か……いるのですか？」
　誰もいないはずの人里に声が響く、二人は声のした方向へ咄嗟に顔を向ける。月明かりが一人の人影を照らす。
「あの……わ、私危害を与えるつもりはありませんし、その……えっと……」
　その人物は立ち止まって手をブンブン振る。
「えっと……近寄って話してもいいです……かね？」
　両手を挙げてこちらの様子を窺うその人物を見て、二人は顔を見合わせる。
「あ、あのー……あ、あう……」
　殺伐とした人里に少しだけ緩やかな空気が流れた。

◆

「だぁぁぁ！」
　人里から遠く離れた森の中、掛け声と共に一人の少女が手に持つ得物を振りおろす。それを眼の前にいた別の少女が避ける。
「くっ……いつものように、斬れない」
「あたいは……あんたなんかに構ってる暇なんて無いのよっ！さっさと、あたいにこてんぱんに倒されなさいよっ！」
　避けた少女、氷の妖精チルノは手に集中し、辺りの冷気を集める。その瞬間を少女が逃がす訳もなく、両手の刀を構え直しチルノに向かって走る。チルノは集めた冷気で氷を作り、更にその氷の形状を変化させる。
「これで終わりだっ！」
　少女が刀を左右から挟むように振りかぶったその時
「させないよー」
　その場の雰囲気を一気に壊してしまうようなのんきな声がしたと同時に少女の眼の前が闇に包まれた。その闇は月の光の侵入するのさえも拒む、漆黒の闇。
「くっ！こ、これはっ！？」
　標的が見えなくなった少女は混乱する。
「黒は他の色を全て飲みこんでしまう。今の貴女には黒以外の色が見えて？」
　先程とは違った氷のように冷静な声が聞こえる。勿論、少女に声の主は見えない。
「くっ！」
　少女は刀を振り回すが、闇雲に振り回す刀が当たるはずもない。その間にチルノは氷の形状を変え、鋭い氷の刃を作り上げていた。それで闇の中を思いっきり突いた。
「ぐ……ぁぁぁ」
　闇の中から苦痛の声が聞こえる。のんきな声を出した少女が闇を消すとそこには左胸に氷が刺さった少女が立っていた。少女は刀で自身を支えて立ち上がろうとしたが、力尽きて地面に倒れてしまった。
「ゆ……こさま……しょう……申し訳、ありませ……」
　少女がそう呟くと、同時に白い光が少女を包みこみ、球が二つ浮かびあがった。
「この子、既に一人……まさか」
　冷静な声の主が顎に手を当て、思考しながら言う。
　白い二つの球はチルノの体に溶けるように入り、消えた。
「あたいは、こんな所で負けられない……待ってろよ……」
　月明かりの下、三人の少女が立っていた。そのうちの一人は決意を秘めた眼で空を見上げていた。

（つづく）

〈作者コメント〉
　続きました。妹紅とリグルが頑張ります。
　鳴呼夏コミ、行きたかった……

9月号テーマ

『東方紅魔郷』

『リグルちゃんウフフ』　貴キ

東方で最初に好きになった女の子は妹様でした
■C78お疲れ様でした!暑い中有難う御座いました!

『 コスっちゃえ☆りぐるん・紅魔郷編 』　やにたま

紅魔郷特集ということでリグルに紅魔郷キャラのコスをさせてみました♪・・・同ネタ多数の予感（あ

『 吸血鬼と蟲 』　豆板醤

夏コミ行きたかったなぁ…

『 蟲の知らせと月時計 』　蛍光流動

幻想郷一正確な時間のお知らせ

『 十六夜りぐるん 』　モフパカ

咲夜さんコスのリグルです。ポーズは萃夢想や緋想天の咲夜さんの後退時ポーズです…なんというマイナーなポーズチョイス…。

リグると！
黒い霧事件!!

なんだろう、このキリ…
羽が湿気で重くなって飛びづらいよ…

はっ！サービスシーン!?
あ、いや、見かけない女の子が倒れてる?!

ひどい怪我…いったいだれがこんな事を…
むしゼリーとか食べるかな?いや、やめとくか…

あっ気が付いた?

おお…
目覚めて早々いいものを見つけたぞ…
!?
ぐぁ

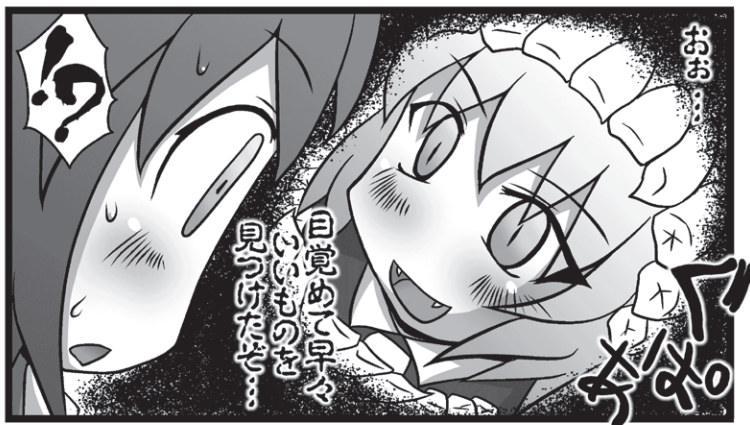
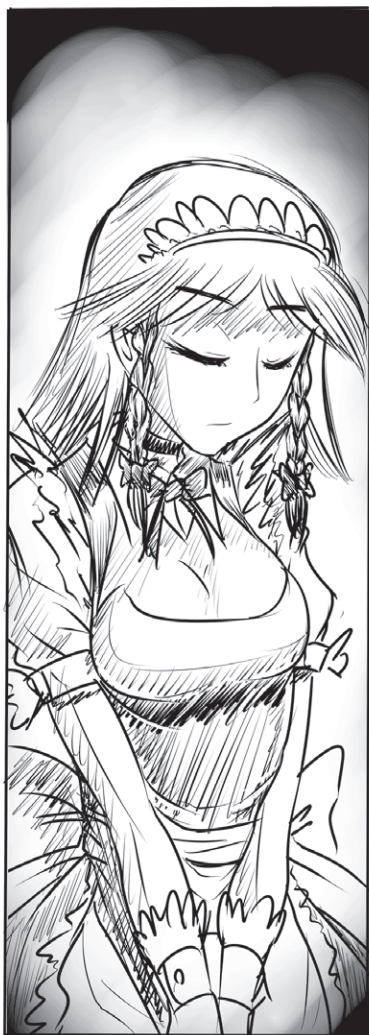
チルノ編

チルノ！しっかりして！

チルノのかたきは必ずとるわ！

東方妖々夢

ガブ
あ…

あっ霧が晴れたみたい
あなた、名前は?
リグル…
よろしくねリグル！

描いたひと：ひどぅん

『・・・急に呼び出されたと思ったら・・・
これはどういうことだ？
紅い悪魔。　レミリア・スカーレット。』

「あら、見ての通りよ。
闇に轟く光の蟲、リグル・ナイトバグ。
それとも言葉にしないと分からないのかしら？」

『・・・』

「しょうがない奴ね・・・
咲夜、言ってやりなさい。」

「かしこまりました、お嬢様。」

馬？
とーほー
うまきょう
かいたバカ：げんじろう

もちゃもちゃ
仔馬?
作画がクソすぎて分からねかったかしら?
ヒヒーン
ブルブルブル
もちゃもちゃ
もちゃもちゃ
もちゃもちゃ
もちゃもちゃ
もちゃもちゃ
もちゃもちゃ
もちゃもちゃ
とりあえず今回はイメージ的にこんなんだから
ペペペ万歳!
これだけいれば仔馬郷で押し通せる
いやいやいや押し通すってあーた自分で無茶やってるって分かってるんじゃないですか

ちゃんと紅魔郷出身の人達も呼んでるから大丈夫よ!
←日傘
何がどう大丈夫なのさん?
…あれは?
しあわせ〜!
仔馬の馬刺よ巫女が泣いて喜んでいるわ
食うのかよ!!
貴重な肝ぞうもあるよっ!
っ!! ちょ!おまっーー!!
自主規制
三角仔木馬よ
…見なかった事にします
そうねそれがいいわね
ところでどうして私を呼んだの?
仔馬についた蟲の処依頼よ
血い吸うでー!!
おとノミとか?
報収はその蟲達
終わったからさっさと帰っていいわよ
今日は紅魔郷参加者の集いだからね
行こうおまえ達
…まあ想像の範囲内だよ…
おわれりー

クロックのおおくりする

東方茶湾虫

昆虫独言中…

殺虫！

ギャアアア！
フマキラアアア！

えっ！客人
だったんですかっっ？
私てっきり…

ギャァァァァ

それなら早く
言ってくださいよぅ

神経系が
分解される
ぅぅぅぅぅぅ！

あのぅ、美鈴さんの出身てやっぱ…
はい、肉まんもダ●ボールの味ですよっ
怒られるからっっっ！
よーし よしよし お手っ
ふせっ
そーら とっといでーっ
ワワンン
やめてっ！
これ以上ファンを困らせないでっっ！
門番のお仕事大変ですか？
大変っすよー 昔は華人小娘なんて呼ばれてちょっと天狗になってたんですけど…
紅魔館に就いて憧れの女性ってのに出会いましてね…
そうなんですかー
ところで華人小娘てなんて読むんですか？
スタスタ
フフフ… 美鈴 見ない顔ね…
！？
だぁれ！？
レミリア様！！
強さと優しさと包容力を兼ねそなえていて…
私もこうでありたいと思える女性 完全で瀟洒なメイド 十六夜咲夜さん
この人と共に働けると思うと頑張れるんですよ
へぇ…
ところで瀟洒ってなんて読む
そう 私が あふれでるカリスマ レミリア様よ
な…顔が描写しきれない程のカリスマだとっ
作画効率とかそういうんじゃないっっ！
あぁっ 咲夜さんっっ！
！？
バカにしてんのかっっっ
あっ よく見るとナイトキャップがパンツだ！
カリスマだっ！
いや、変態だっっ！

ぜっかくだから
ゆっくりして
いきなさい
しょこたん
フランならどこかにいると
思うからパチェに
聞いてみるといいわ
ゴゴゴ
カリスマ
あらめずらしい
お客さ…
はっくしょん!
はっくしょん!?
ゲパァ
気にしないで
吐血は呼吸みたいな
ものだから…
アナタの事は
聞いてるわ
歓迎す……
ボトボト
ガタ
アバラがっ
あっ!
カブトムシが出てきた!
けっぽらーー!!
パチェー
むきゅう!
ダッ
リグルがきてるの?
はやくいってよ ばかっ
リグルー!
リグルー!
行っちゃった…
レミリア様に
妹様をお連れする
よう言われてたのに…
ん?
ゴゴッ
あら?こあ、
その大きな骸は
なに?
先ほど廊下に
巨大な虫が
おりましてですね…
リグルどこー?
ZZZ
おわり

キョロ
んー……………
キョロ

何も見えないなぁ…
紅魔抄
キッカ

ん？
キラッ

島…かな？
ぼや

スタッ

んー？
おやしき？

ちょっとあんた
ビクーン

あんた、
巫女の仲間？

巫女って、
博麗の？
そうそう

まっさかー！
あはははは
そうよねー！
あははははは
笑

じゃー
何の用かな？
ひぇぇ
バシュッ

ふぅん、
虫たちも
困ってるのかぁ

でもまぁ、
すぐに解決
するよ
え？

さっき巫女が
来たからねー
あ、なるほど…

こら
ボカッ
ビクッ

仮にも門番が、
そんなこと
言わないの
パチュリー様……

そこの蛍、
もう帰りなさい
大丈夫だから
え？
でも…

ね
シュウウウウウウウウ
はい

結局…

みんなに
頼まれたこと何も
できてないいん
だけど……

信じても
いいか

おわり

「紅魔館の連中にパイを投げつける」なんて聞いて通せるわけないじゃないですか！

リグル紅序を行く

preludenano

せっかく徹夜して用意したのに～

・・・
いいですか？

私はともかく
として、
レミリアお嬢様に
そんなの投げたら
あなた殺されますよ

パイ投げで
紅魔館を攻め落とす
なんて
どういう
発想ｎ・・・
ベチャ

・・・・・
ベチャ

そろそろ
怒りますよ？
ベチャ
い、今やめたら
怒りませんよ
ベチャ
あ、あの
お願いです
やめてください
・・・
ベチャ
ごめんなさい
私が悪かったです
楽しい
続く!!(ただし俺の脳内で)

ヌルゲー化？

〜東方紅魔郷〜

すいません…
下ぬりだけです…

ヌルゲー化

これがやりたかっただけかも

オチなし終

今日は年に一度のバレンタインです

2/14

恋する乙女はチョコと一緒に想いもとどけ…

パチュリグな日々～バレンタイン編～

（季節はずれでサーセン！

どっちゃり

るんだっけなぁ～？

描いた人　東

リグルさんは相変わらずモテモテですねぇあこがれちゃうなぁ～

ホワイトデーは三倍返しでよろしく～♥

いやいやいやいやいや私は本来チョコをあげる立場なんですがどうしてこうなった…

紅魔館
…というわけで
寝るアルヨ
えっ…
すいませんね
魔法の研究に集中したいから
しばらくは誰も図書館に
入れるな、とパチュリー様に
いわれてますので
今日のところは
おひきとり願います
どうしても
ダメなんですか
今日はその…
大事な用事なんです
どうしてもダメなんです
申し訳ないですが

パチュリー様はきっと今頃
高度な魔法の研究に
集中しているのでしょう
その邪魔はさせませんよ

むむむ…

何が
むむむだ

どうしても
パチュリー様に会いたいなら

私を倒してからにしなさい！

あっ

ぎくっ

がんばって作ったチョコをお姉ちゃんに渡すんだから！
蠢符「リトルバグストーム」
カサカサカサカサカサカサ
いぃ!?
やぁあああ
小悪魔さんはリアル虫が死ぬほど嫌いでした

えっ何どうしたの!?
わぁい
パチュリーお姉ちゃん!
って…何その格好?
エプロン?
あれ?リグル?
いや、これはその…
……
えっと…あのぅ…
バレンタインだからリグルにチョコをプレゼントしたくて
でも料理とかしたことないからみんなに内緒でこっそり練習してたんだけど
結局全然うまくできなかった…orz
なんだそういうことだったのか…それにしてもお姉ちゃんかわいいなぁw
咲夜さんとかにおしえてもらえばいいのに…

で、これがその
一応完成した
チョコレー…ト？
なんだけど…
でろ～ん…
さ、さすがの私でも
これはちょっと
食べれそうにないよぉ…
ひえぇ
ですよねー
うんまぁなんてゆうか
誰にも向き不向きって
あるからさ
料理ができなくても
いいじゃない
お姉ちゃんは頭良くて
強力な魔法とか
使えるんだし
ね？
えぇ…まぁ
そうねぇ…
むむむ…
今渡しづらいけど
あ、あの
実は私もチョコ作ってみたんだ
うまくできたかわかんないけど
食べてみて？
おぉ…
リグル…

もぐもぐ

もぐ

う…う…

うまい！

本当？
よかったひと安心

うん
うまい
チョコだ

いかにも
チョコってチョコだ

いやそうゆう
某グルメ漫画ぽい反応は
いらないよぉ…

もぐ

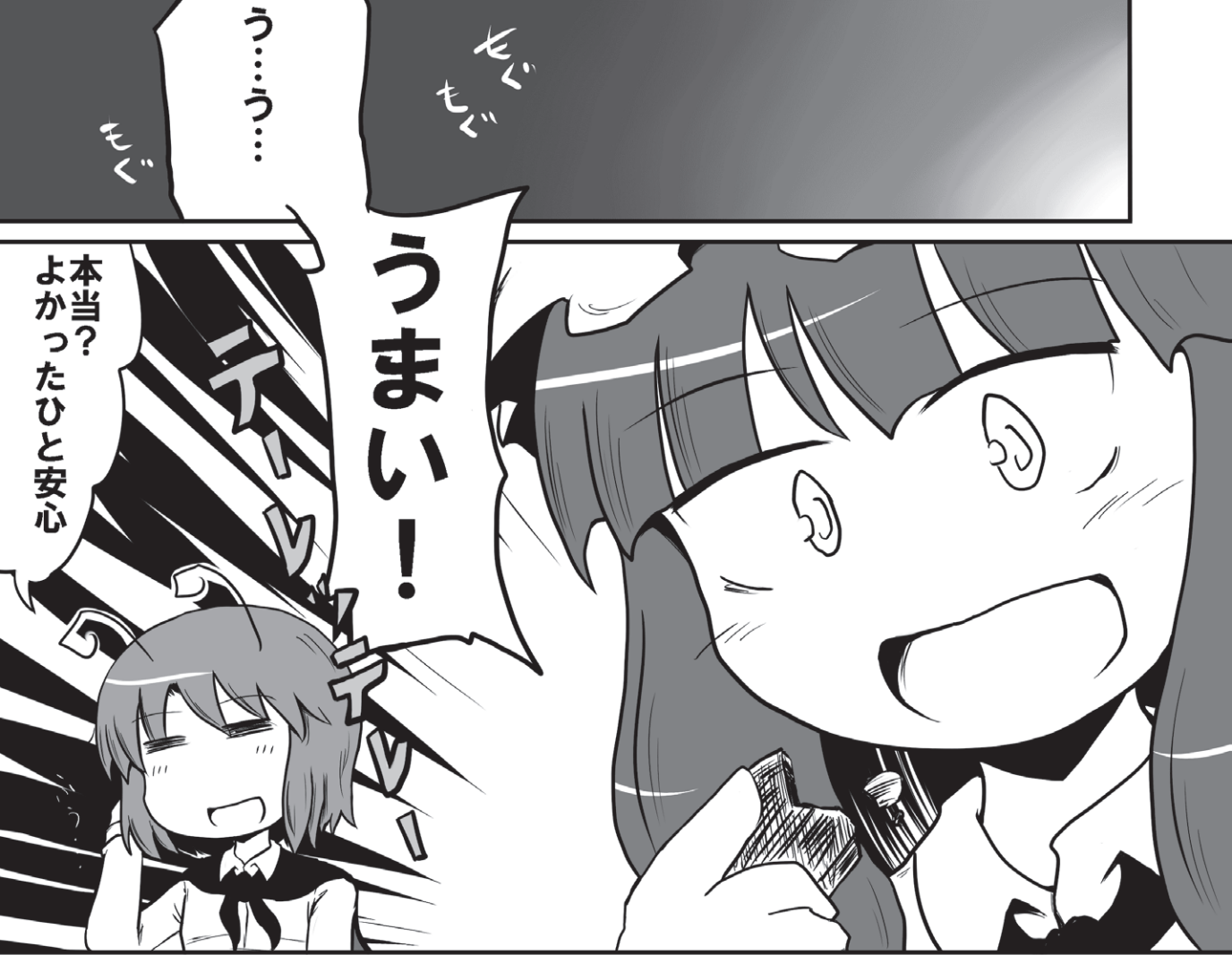
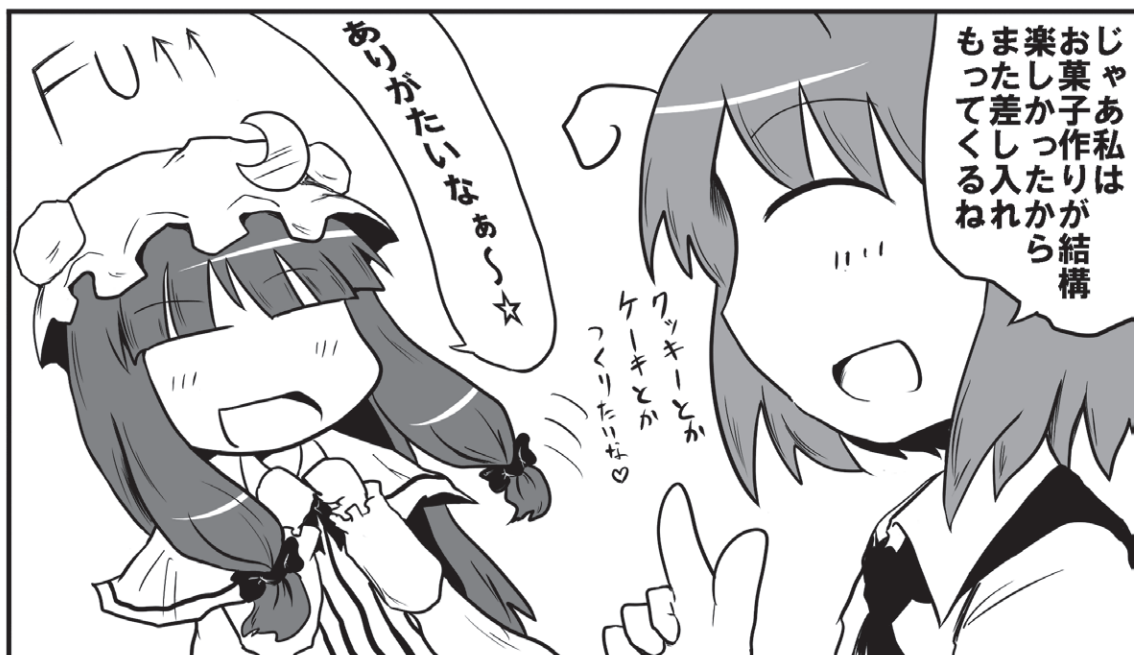
もぐ

と、とにかく

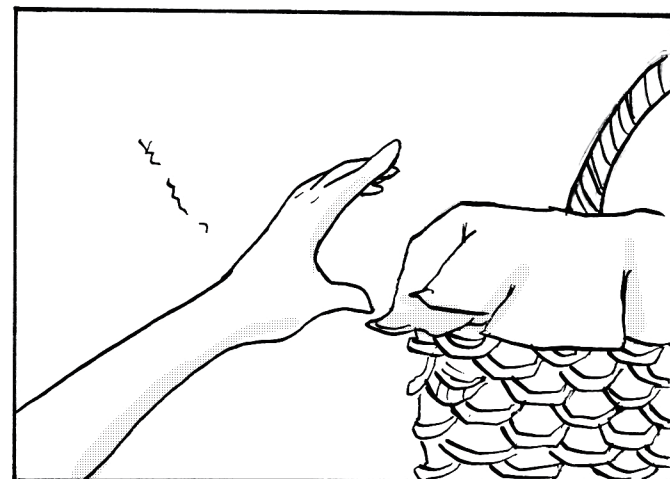
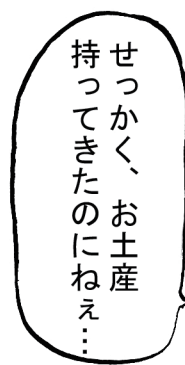
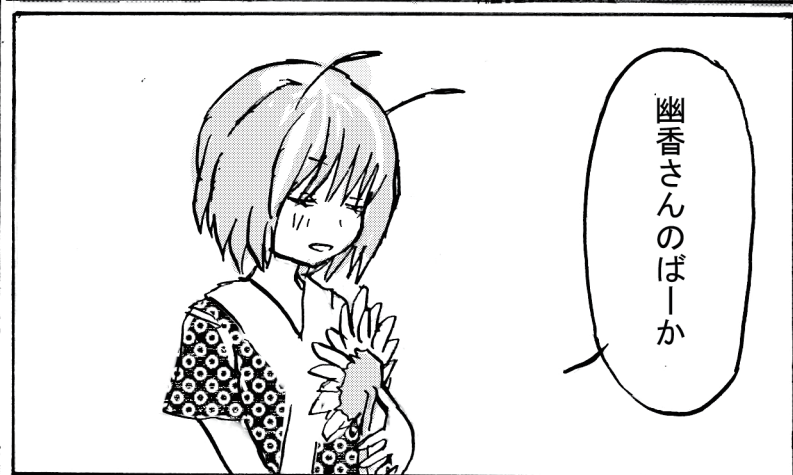
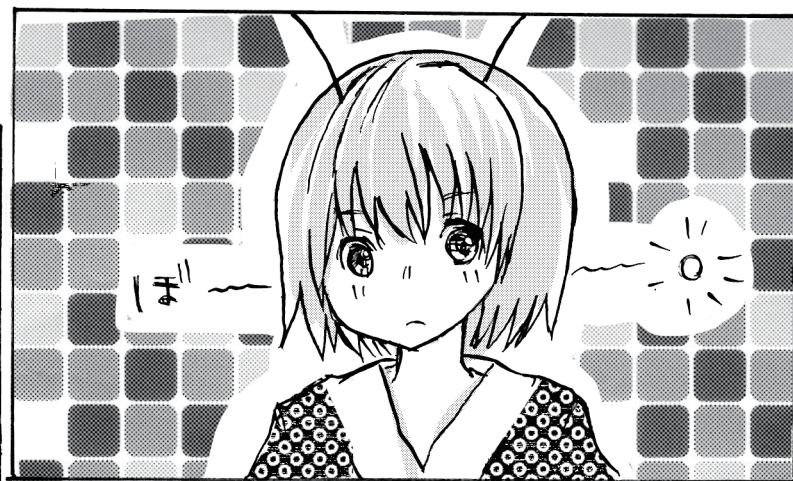
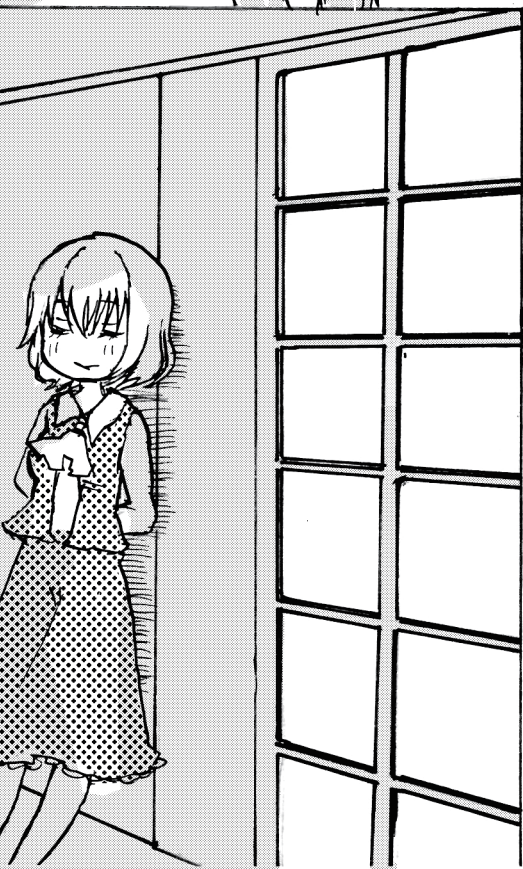
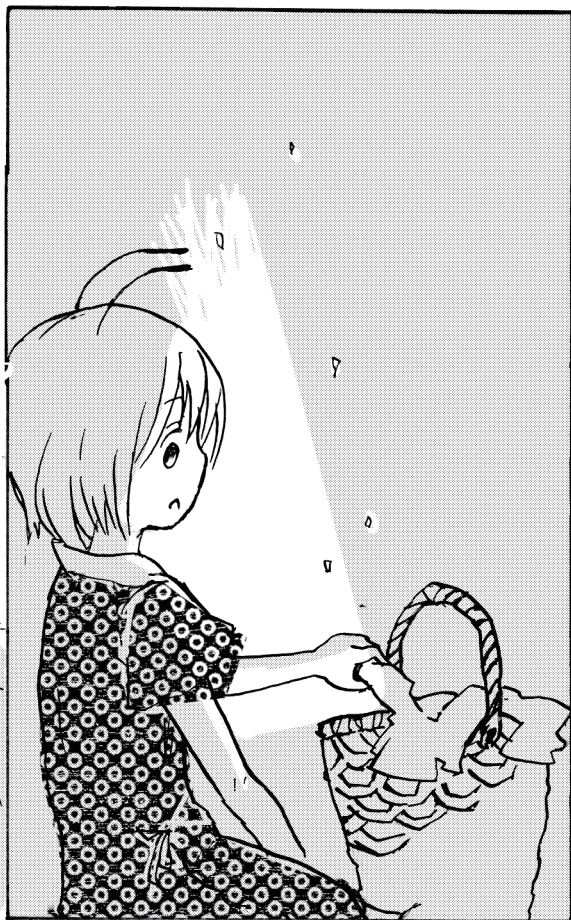
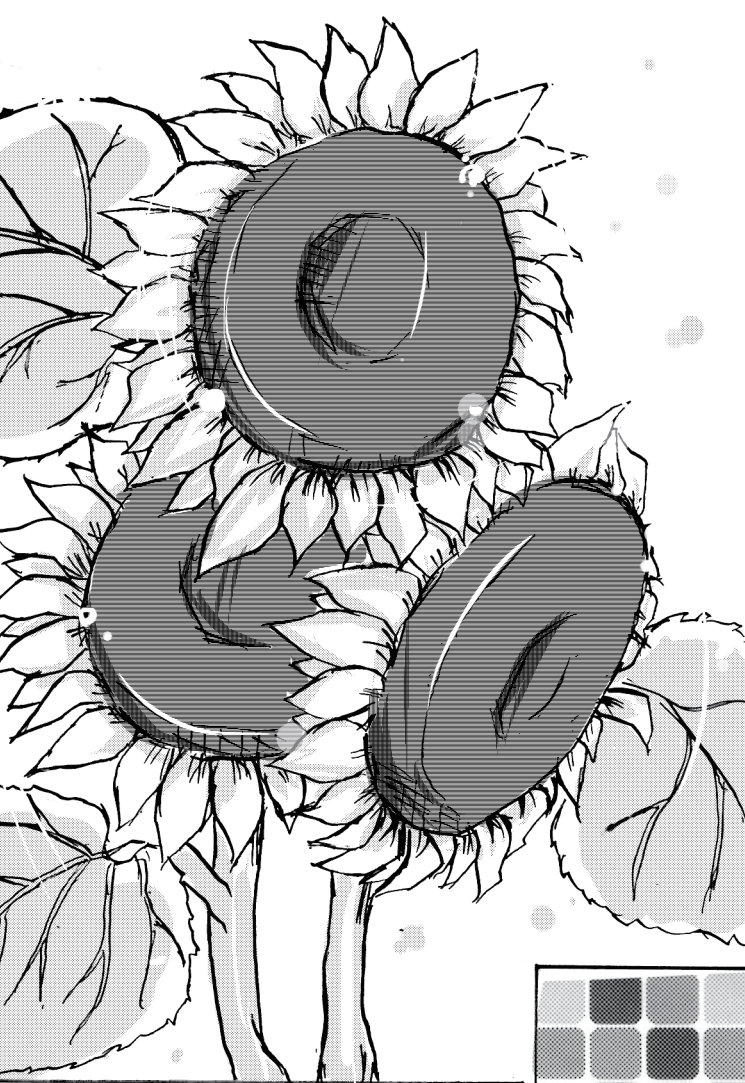
キリッ

リグルの言うとおりね
料理はダメでも
私には魔法がある…

じゃあ私はお菓子作りが結構楽しかったからまた差し入れもってくるね
クッキーとかケーキとかつくりたいな♡
ありがたいなぁ～☆
FU↑↑
あ
虫コワイ
虫コワイ
虫コワイ
虫コワイ
すっかり忘れてたけど
小悪魔はいったいどうしたのかしら？
いやぁ
サーセン
おわり

永遠亭
Summer in a pot
おはなし。けいにうとう
え。しゅうすい
ヒラ
あら、なんだかご機嫌ななめね
ピクッ
クシャリ…
ポト
別に、退屈なだけです
ていうか、ノックして下さい。
早く家に帰りたいなぁ
粉だらけ

ワガママ
言っちゃダメよ
早く体を治しなさい
大体
ぷい
幽香さんが
私を飛ばしたのが
悪いんじゃないですか
ブンブン
キャー
ホームラン!?
カコーン
あっははは☆
※回想
いやー、まさか
肋骨が折れて
肺に突き刺さるとは
思わなかったわ
今年の夏は
色々しようって
約束してたのに
すー
ぷっ
しょぼん…
また、
来年があるじゃない
ね、あなたの体が一番
大事なのだから

せっかく、お土産
持ってきたのにねぇ…
ピクッ
おみやげ…
欲しい？
欲しくない？
ニヤニヤ
べ、別に
はぁ
あ、私。
永琳に挨拶してくるわ
荷物見ておいてね
勝手にいじっちゃダメよー。
パタム。
チラッ
そ〜っ

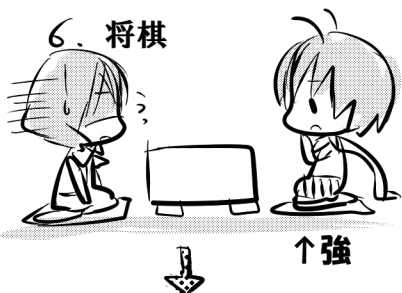
ぼ～～
幽香さんのばーか

おまけーね。

Summer in a pot

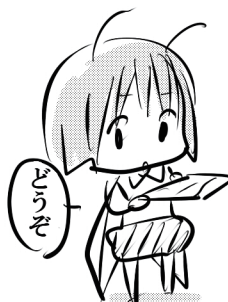
鉢かよ…

※「鉢植え」
↓
「根がある」
↓
「病気が根付く」
↓
「退院できない」

BAGMAN

このマンガが出来るまで。

5. タイトルが決まらない。

お前が決めろよ。
お前がかな。

ここまで、読んでくれてありがとう

スイート・ドリーム・スイート、
あるいは妖精の排泄行為の有無について
〜金平糖のような夢の中で〜

描いた人
羅外

廃校

著者：くろと

猛暑であり、酷暑であり、残暑だった。ねちっこい暑さは体に纏わり付くよう絡み付いて、不快の指数を一段飛ばしに駆け上っていた。

だが、リグルは森林の繁みで見つけた、木造建築物の中で涼んでいた。その建築物は三階建てで、同じような部屋がいくつもあり、その部屋とは慧音が教える寺子屋の細長い一室と瓜二つだった。しかし、寺子屋とは違い、畳張りではなく板張りで、部屋一杯に椅子と小さな机が四十組、段差のある教壇には大きめの椅子と大きめの机が一組、理路整然と並べられていた。また、寺子屋で何度か見た、黒板と呼ばれる黒い板が各部屋に必ず二枚あり、そのうち一枚は寺子屋で見るのとは比較にならないほど大きい代物である。不思議な事に、どの黒板にも右隅に白い文字で日直と書かれており、その下には男子、女子と続き、名前が入るぐらいの空白があった。

「二年三組……？」

表札のように掲げられたプレートに、リグルは視線を奪われていた。

「リグル」

その背後から声を掛けてきたのは、くすんだ金髪に赤いリボンを巻いた少女、ルーミアである。彼女は、しかし、手に持つカキ氷を頬張っていた。

「なにそれ？」

「カキ氷」

「そうじゃなくて」

「さっき職員室でもらった」

「職員室でもらった？」

「ん」

肯定したルーミアに導かれるようにリグルが歩き始め、板張りの廊下に二人分の足音を軋ませた。ルーミアはカキ氷をシャリシャリと小刻みに租借しては、頭痛を起こしたように抱えて、また、カキ氷を租借する。といった工程を繰り返していた。今にも崩落しそうな階段を一つ上ると、目的地に到着した。ルーミアの言うように窓枠の上辺には職員室と銘打たれたプレートがあり、その一室が職員室だと判明する。引き戸に指を掛けると、思いのほか職員室が冷えている事に気づく。引き戸を開けると、中に滞留していたらしい冷えた空気が漏れて、リグルの頬と項をなぞっていた。職員室も今まで見てきた部屋と同様、机と椅子が規則正しく並べられていた。ただし、椅子も机も大きく、子供用ではない。と、リグルはここが冷えている原因を椅子の上に発見する。

「レティたちも居たんだ」

「あら、いらっしゃい」

「おいすー」

硝子の器に盛られたカキ氷を食べているレティと秋静葉が会釈している。リグルが会釈を返すと、レティは近くの椅子を適当に指し示した。リグルとルーミアが座ると、レティはハンドルの付いたペンギンらしき機械に、氷塊を挟んで、その下に硝子の容器を配置し、最後にハンドルを回し始めた。すると、真っ白い雪みたいな砕氷が容器へと降り注いでいった。ものの一分も掛からないうちに、小さな雪山が生まれ、レティはそれにイチゴシロップを振り掛けて、カキ氷を完成させたのである。もう一つ、ルーミアの空の容器を受け取ったレティは、同じ手順でメロンシロップのカキ氷を作ると、レティはその二つをリグルとルーミアに渡してきた。リグルはお礼を述べて、ルーミアは我が物顔で、二人それぞれにカキ氷を食べ始めたのである。リグルは少しずつ、ルーミアは一気にかき込んでいた。当然のようにルーミアは悶え苦しんだ。

「それにしてもよく見つけたわね。私たちの

隠れ家」
　とは静葉だ。彼女はうな垂れるように机にうつ伏せて、やる気の足りない無気力な表情をしていた。
「隠れ家なの……？」
「そうよ。私もレティも夏の間はやることなくてね。こうして怠惰にしてるの」
「あの……、穣子は？」
「アイツは豊穣の神さまよ。春でも夏でも秋でも引っ張りダコじゃない」
　静葉は愚痴るように囁いて、残っていたカキ氷を口内にかき込んだ。ルーミアと同じく、悶え苦しみ、頭を抱えて捻り始める。
　レティはクスクスと笑い、カキ氷を食べ終えた。
「チルノは元気かしら？」
「あ、ええ、まぁ、元気。とっても元気で、元気すぎて」
「そう」
「……呼んでくる？」
　リグルの提案にレティは首を振って、カキ氷のおかわりを差し出して、呟いた。
「いいわ。冬じゃないもの」
　差し出されたカキ氷に若干引きつつも、リグルはどうしようか悩んだ。悩んだ末に、復帰したルーミアに押し付けたのである。当然にルーミアは一気食いし、それをみた静葉も負けじとカキ氷をおかわりし、互いに悶え苦しんだ。あるいは痛み分けである。
「この建物って、外の世界の寺子屋？」
「忘れ去られた。が頭に付いたね。ちなみに外では学校と言うそうよ」
「なんでこんなところに二人が？」
　それからレティは、記憶の底から思い出を掬い上げるような口調で話し出す。
「ちょうど今日のように残暑の厳しい日だったわね。暑くて堪らなくて、もう溶けてしまいそうで、蝉が煩くて、陽射しは眩しくて、飛ぶのが酷くて。そんな時にここを見つけたのよ。……中に入る前から、やけに冷えていてね。すぐに先客が居るんだって分かったわ。それでも辛かったから入ったんだけど。そうしたら電球が一つ残らず切れていて、窓には暗幕が掛けられて、僅かな蛍光だけが点ってたわ。下駄箱、階段、廊下、普通教室、音楽室、美術室……。と、職員室に辿り着くまでに色々と脅かされたんだけど、まぁ、相手が悪かったわね。それで職員室に辿り着いたら、当の彼等が目覚めの悪そうな顔でくつろいでいたのよ。『形式的でいいから怖がってよ』って怒られたわ。そのときも私はカキ氷を奢ったわね。それ以来、夏はここで涼んでいるのよ。……静葉は、気付いたらなんでか居たわ。いつも妹の自慢話か愚痴ばかりして、彼等を飽きさせていたわ」
　そこで同時に二つの硝子の容器が差し出された。一つはルーミア、もう一つは静葉である。互いに完食しており、顔を真っ青にしながら、競争している。レティは無言な笑顔で、ペンギンのハンドルを回し、先ほどよりも三倍はある雪山を完成させた。ルーミアと静葉は奪い合うように容器を受け取り、かき込んだ。そして三倍、悶え苦しんだ。リグルは哀れなものを見下すような目つきで、二人を見捨て、レティに向いた。
「それで彼等はどうなったの？」
「もう誰も驚かないからって、三途の川に向かったわ。一人だけ、諦めきれない化け傘が頑張ってるみたいだけど、しばらく見てないわね。……そういうわけで、いまや学校は私たちの隠れ家なのよ」
「ふぅん……」
　それだけ僅かに応えて、リグルは黙ってしまった。レティがニコニコとカキ氷を差し出してきたからだ。
　暑い残暑が続いている。

（終）

〈作者コメント〉
　暑くて……

3D → 2D

著者：MR

一人の青年がバイクの交通事故で亡くなった。
名前は田中 大貴

一旦命を落とした者は三途の河へ行き、そこから閻魔様の元へ行くという。
しかし彼は、覚えていなかった。
亡くなる瞬間までは記憶があるが、目の前にある真っ赤な館に着くまでの経路が分からない。
目の前には真っ赤な館。真後ろの遠くに大きな湖が見える。
右手遠くには真っ赤な館に勝るとも劣らない大きな洋風の館があった。
ここは天国若しくは地獄ではないのか。考えたが分からない。
唯、この館や湖の形、位置には見覚えがあった。
「・・・幻想郷？？」
取り敢えず、此処は幻想郷と仮定するなら、あの館は紅魔館。
後ろの湖はチルノや大妖精がいる湖。奥の館はプリズムリバーの館。
全てが一致している。
もしこの仮定が合っていれば、あの場所は危険すぎる。
もう2度と死は味わいたくない。
そんな希望と恐怖を持ちながらその場を離れた。

＊

紅魔館
幻想郷に男性が来た。という今までには無い、ある意味異変に最初に気がついたのはやはりレミリアであった。
「咲夜。今夜もしくは明日、此処に男の人間が来るかもしれないわ」
「男の人間・・・？あの森近霖之助とかいう変態褌人間でしょうか？」
「いいえ、違うわ。それに彼は正確には人間と妖怪のハーフよ」
「ハーフ・・・幽霊嬢の庭師と同じですか？」
「そうね。あと取り敢えずその褌の話から逸れましょう」
「はい。それでその男の人はどうしましょう？」
「生きてる人間であれば、スキマ妖怪に。死んだ人間であれば、幽霊嬢もしくは裁判長に引き渡しましょう。それで来たら呼んで頂戴。」
「了解しました」

＊

妖怪の森
日はもう落ちてしまった。
夏にこの暗さだから9時は回っただろうか。

幸い唯一の所持品の財布にはお金は入っていた。
しかし此処は森。
誰か住んでいる可能性も低い。
もしここが幻想郷であるのならば、人食い妖怪も出る筈だ。
先ず此処から脱出したいのだが出口が見当たらない。
気がつけば辺りは真っ暗で３ｍ先も見えなくなっていた。
今日は野宿だと決心し、適当に場所を見つけようとした。
「あのー・・・」
後ろから声がしてビックリして振り返る。
そこには黒いマントをした緑色の髪の少女がいた
彼女には見覚えがあった。すぐに名前もでた
「リグル・・・・？」
「えっ！？何で私の名前を・・・」
正解だった。仮定も正解だった。あの館には入らなくて良かった。
「やっぱり。それじゃあ此処は幻想郷・・・？」
「そうだよ。ここは幻想郷の妖怪の森」
「それで君は何故こんなところにいるの？ここは人食い妖怪が出るから危ないよ」
「それは。。。」

＊

話が終わった。
話の途中に数匹の妖怪が来たが（勿論彼を食べに）リグルが話して助けてくれた。
そしてミスティア、ルーミア、が来た。２人もリグルの話を聞いて納得してくれた。
「それじゃあ明日、紅魔館に連れてきましょう。何か分かるかも。今日は取り敢えず屋台で話でもしよう」
「流石ミスティア！何かオヤジみたいな考え！！」
「それ褒めてないよね・・・？」
見た目は人間離れしているが、喋りかた、様子は人間の女の子そのものだった。

＊

ミスティアの屋台では取り敢えず、自分の全てを教えた。
そして自分の知っている幻想郷と本当の幻想郷の違いを教えてもらった。
夜通し喋って食べて飲みまくった。
彼女達は見た目はまだ未成年に見えるが、妖怪なので何十倍も生きているらしい。
「あー、ミスティアお金はどうすればいい？」
「いいよいいよ。今日は奢り」
「いや、女の子からただ食いって何か」
「アハハ。ありがとう。でもいいよ色々楽しい話も聞いたし」
「んじゃお言葉に甘えて」
「あれ？ミスティアって酒に強いのか？無茶苦茶飲んでたけど」
「うん。私お酒強いの」
「そか。隣の２人はベロベロだな」
「うん。まだ妖怪にしては幼い方だしね」
「そういえばミスティアってさっきから全く喋ってなかったけど・・・？」
「あ、、ゴメン。私の話しても２人が面白くないと思うから」
「今２人寝てるからいいんじゃ・・・？」
「あ！そうだね」

＊

夜通し喋り続けて、何時寝て、何時起こされたか分からない。
気がついたら物凄い頭痛に苦しんでいた。
リグルは朝の目覚ましサービスと言う奴でもういない。
しかし何故かチルノがリグルの席に座ってミスティアと喋っていた。
チルノが自分に起きたことに気がついた。
「あ、人間起きた。んじゃさっさとこーまかんに行くわよ」
自分はどうなるのだろうか・・・

＊

ー紅魔館ー
「おーい吸血鬼！居るのなら出てこーい！」
館の中で大声で叫ぶチルノ
「どうしたの、氷精。お嬢様なら寝てるわ。

まだ昼だし」
奥からメイドの格好をした女性・・たしか十六夜咲夜とかいう人。
が出てきた。
自分と目が合った・・・
「・・・男性？」
「はぁ。見ての通り男です」
「それじゃあお嬢様をつれてくるわ」
「・・・なんで？」
「お嬢様は貴方が来る事を予想してたのよ」
そして館の奥へ消えていった。

＊

「へぇ、貴方が」
「それで俺はどうなるんですか？」
結構喋った。もう自分の事を何度も話した。
嫌になるくらい。
「周りの人たちと同じように三途の河を渡って、閻魔のところへ行って天国か地獄かを決められるわ」
「それは何時ですか・・・？」
「んー今」
「今！？」
「貴方、貴重な男だしもう少し話したいけど、ここのルールなの」
「本来の場所に戻らないといけない」
「大丈夫、痛みは感じないようにするわ」
「ちょっとまって！」
さっきまでミスティアの後ろに隠れていた筈のリグルが自分とレミリアの間に割り込む。
「この人をここに残しておく事は出来ないの！？この前入ってきた巫女も向こうの人間だったのに！」
「人間・・？早苗のことね。彼女は人間じゃない。現人神よ」
「それにこれは私の決められる事じゃないの」
「それとも無駄な戦いをして消されたい？」
「うっ・・・」
言葉に詰まる。
「リグル・・・有難う。もういいや」
「えっ、でも」
「もともと此処には入れなかった。けど何故か入れた。それだけで良かったんだし」
「・・・・。」
「そろそろお願いします・・・」
「分かったわ。咲夜心臓よ」
「畏まりました」
咲夜さんが俺に向けて何かをした。
もう一度死ぬ。正直怖かった。リグル達は、自分が殺されるのを見るのが怖いのかもう何処かに行ってしまったようだ。
「怖がらなくて良いわ。咲夜が心臓部だけ時間を止め痛みは出ない筈よ、多分」
レミリアが真顔で呟く
「多分！？」
笑いそうになった。
一瞬自分が殺されるという恐怖を忘れた。
ストン
その瞬間自分の胸にレミリアの手から放たれたグングニルが刺さった。
痛みも恐怖も何も無かった。
あの発言も優しさなんだろう。
薄れていく意識でそう思った。

＊

三途の川
ここは面白い。
沢山の屋台が出ており死人とは思えない程賑わっていた。
人魂同士も雑談をしていた。
何処で生まれ、何処で死んだか、そんな事から他愛も無い話、周りではいろんな話をしていた。
そんな周りを楽しみながらふよふよと動いているといきなり後ろから話しかけられた。
「あんたも何か未練でもあるのかい？」
「小町・・・？」
「おお、あんたアタイの名前知ってるのかい？」
「あっ、外界の人か。ちょっとあんた外の話してくれよ」

＊

リグル達に話したのと同じ様な話に加え幻想郷での話をした。自分の気持ちも。もう誰とも会えないと分かっていた。だから全てを話

せた。

「あんた結構大変だったんだね。アタイから映姫様に話しておこうか？」

「ありがとうございます。でもあの人に言っても無駄かと」

「あはは、よく分かってるね。でも０じゃないだろ？例え天文学的数字でも当たる人は当たるんだ」

「そうですね。有難う御座います」

話しているとふよふよと人魂が流れてくる

「おお、新しい乗客か？アンタちょっと待っててよ、こいつを連れてくるからさ」

「わかりました。待ってます」

「んじゃ、あとさっきの事映姫様に言っておくよ」

＊

「映姫様〜新しいの連れてきましたよー」

「はいご苦労様。それにしても小町、貴方は他の人たちに比べてペースが遅くないですか？それに今日は特にまだ1体／時ペースですよ？」

「すみません。ちょっと現世に未練がある奴の相談を受けてまして」

「ああ、幻想郷に流れ着いた人間のことですか」

（あれ？怒らない・・・？）

何時もなら「そんなの気にするな」とか言って怒るのに今回は普通に言っただけだった。

「ん？何故怒らないか？ですか」

（なんでこの人はあたいの考えてる事が分かるかねぇ。地霊殿の主じゃあるまいし）

「貴方の考えてる事は大体分かります。あと地霊殿は関係ないでしょう」

「本当に読めるんですね」

「まあそんな話はいいのです。私が言いたかった事はその人間をここに連れてきなさいという事です」

「えっ、でもあの人はまだ渡る事を覚悟してないのでは・・・」

「いいから、つれてきなさい」

「・・・はーい」

＊

自分は何かしたのだろうか。

幻想郷に偶々流れ着いた者は何か危険なんだろうか。

そんな事を思いながら小町の舟に乗る。

「あの・・何で連れて行かれるのか分からないのですが・・・？」

「そりゃあたいだって知りたいよ。映姫様が連れて来いの一言なんだもの」

「まぁどうにかなるさ」

＊

「映姫様〜連れてきましたよ〜」

目の前に閻魔様がいた。

皆、閻魔は怖いと言っていたが、失礼だが、そんな事は全く無い。

むしろ幼く見える。むしろストライク。

その閻魔様はいきなり口を開いた。

「田中大貴、貴方を幻想郷への移住を許可する。生前の体も戻す。」

「「えっ！？」」

俺と小町は同時に声をだした。

想像の斜め上を行く、天文学的数字が当たったのだ。

「何でですか？」

「本来は冥界行き確定なんだが、」

「妖怪が一人で来て、貴方を助けろ。自分と引き換えでもいいから助けろと」

「・・・ありがとうございます！」

「礼は彼女達にしてあげなさい。あと小町私は元々慈悲深いのですよ？」

「ぅそだ・・・絶対うそだ」ボソボソ

舟での帰り際小町はずっと呟いていた。

自分で言った天文学的数字が当たってしまったからだろうか。

＊

「ほいっとうちゃーく」

「ありがとうございました」

「どういたしまして。あたいも結構暇つぶしになったし。」

「あ、そうだ。何時でも此処においでよ。あたいが渡らしてあげるから」

「いや、流さなくて良いです。でもまたお話には・・・」
久し振りに笑った気がした。安心した笑顔が。
「いいよ。いつでもおいでよ。何でも相談に乗るよ?」

＊

帰り道　よく考えたら家に帰るわけでもないから帰り道ではない。
でもリグル達にはお礼をしなければ。と思った。
何をしようか。驚かしてやろうか。そんな事を思いながら道を行く。
よく考えたらまだ二日しか経ってない事に気がついた。
何か遠くでパタパタしているのが見える。・・こっちに気がついた。
「あれ・・・?ひろ・・・き?・・・・おーい!!」
・・・・ミスティアだ。
こっちに気付くと凄いスピードで飛んで来た。
「よかった!戻って来れたんだ!」
嬉しそうに周りをくるくる回っている。
「どうして戻ってこれたの?・・・まさか抜け出してきた?」
自分がこっそり抜けてきたと思って、不安そうな顔になるミスティア
「違う違う。閻魔様が許可をくれたんだよ。ミスティア達が話付けに行ったんじゃないのか・・・?」
「え?私は行ってないよ。それに昨日からルーミアと2人で貴方をどうやって助けるか話し合ってたの」
「2人?リグルは?」
「リグル・・・?あっ、何か用事があるって行って何処かにいったわよ」
「まさか、あいつ彼岸まで一人で・・・」
「え・・・」
「大丈夫じゃ・・・ないだろ」
「俺取り合えず閻魔様にリグルの事聞いてくる」
「それじゃ、私森の方を探すわ」
ミスティアが飛んで行った。
自分が帰って来れたのに、そのせいでまた心配をかけた・・・
リグルに何も無いと良いが。

＊

「小町さん!閻魔様のところまで連れて行ってください!」
俺はダッシュで冥界まで来た。
途中で誰かに生身では負担が大きい。とか言われたが気にしていられなかった。
「どうした?大貴もう幻想郷は嫌になったのかい?」
「違います!リグルが居なくなったんです。リグルが自分と引き換えでいいからって言ったみたいで」
「え?リグルならさっき三途の川にそって飛んで行ったよ?」
「んじゃちょっと見てきます」
「いやいやいや。あの川は泳げないよ。沈むのみ」
「んじゃどうすれば・・・」
「だから、あたいが乗せて行ってあげようって話だ」
「ありがとうございます」
「んじゃ出発するよ!」
小町も自分の焦りを感じたのか結構なスピードで進んでくれた
「この川は特別でね、この舟以外は浮かないし、このオールでしか進まないのさ」

＊

小町と大貴が話す少し前
三途の川空中
「あー、怖かった」
ほっ、と胸を撫で下ろすリグル
自分よりも何倍も強い相手を前にするとどうしても緊張してしまう。
何処かであの人間が彼岸から帰ってきているかも知れない。
少し探したが、正直凄い数の魂で例え人型でも分からない。
「ちょっとあんた、待ちなさい」
増援を考え、帰ろうと方向を戻したとき後ろ

から声がかかった
「どうしたの?巫女さん」
「あんたのところの虫が大量に家に来たのよ。お陰で参拝客が全く来なくなったわ。だから元凶を黙らせに来たわ」
「参拝客が0なのは元々でしょう?でもいいわ受けてたつよ」

＊

大貴と小町がリグルと霊夢を見つけたのは、2人の弾幕勝負が終盤に差し掛かった時だった。
「これで最後よ、霊符夢想封いn・・・え?」
霊夢の持つ御札が異様な光を放ちだした。
その瞬間大量の光の弾が放たれた。
本来ならリグルにだけ向けて行く筈の弾幕は八方に凄いスピードで分散した。
「大貴伏せなっ!」
予測していた小町は急いで舟を動かす
「ッ!!」
弾幕を放出し切った御札が弾け霊夢は岸の方へと弾き飛ばされた。
「大貴ッ大丈夫かい!?」
「大丈夫です。でもリグルは!?」
上空を見上げた瞬間リグルが被弾した。
そのまま川へと落ちた。
「リグルっ!」
川に向かって飛び込んだ。
この川では物は浮かないって事は完全に忘れていた。
「ちょっ、あんた!」
水中でリグルを捕まえて水上に出ようとした。
・・・浮かない。上がれない。
「あ・・」
この時になってこの川に浮力は存在しないことを思い出した。
そろそろ息が持たなくなる。・・・死
車の次は川か・・・
目の前がどんどん白くなる・・・
この前と同じような、体が軽く浮くような感じ、そして何かが服に引っ掛かるような感覚。
最後に死神の鎌が首にかかったのか・・・

＊

柔らかい感触が全身で感じられた。
白かった景色がどんどん輪郭がはっきりしてくる。
木の天井・・・家?
五感が少しずつ回復してくる。
それにつれて、
薬品のにおい、周りの声がどんどんはっきりしてくる。。
「・・・あれ?俺は」
「やっと魂が帰ってきたわね」
そういって女の人がコップを渡す。
横に居た女の人が部屋を出て行った
此処は何処だろう?俺は何故此処に居るのだろう。さっきまで何してたっけ?
「まあ水でも飲んで落ち着きなさい。まだ頭痛とかする?」
「いや、大丈夫です」
水を飲んで幾らか落ち着いたところでさっきの事を思い出した。
「貴方、どうなったか覚えてる?」
「いや。全く」
「大貴!」
沢山の人たちがぞろぞろと入ってきた。
そうだ。被弾したリグルを助けようとして、川に飛び込んだんだ。
「貴方は、三途の川に飛び込んだの」
後ろに居た小町が割って入ってくる
「私があそこの仕事に着いてから初めてさ。自ら川に飛び込んだ人は」
「・・・本当にすみません」
「何か助けようとしたのに皆に迷惑かけたみたいで・・・」
「気にしなくて良いよ。お陰で私も助かったし」
「次から気をつけておくれよ。2人を鎌で持ち上げるのは正直もう勘弁だよ」
「え?鎌で持ち上げた?」
「そうさ。あんなとこ助けに飛び込めないからあたいが鎌で服を引っ掛けてぐいっと」
小町が鎌で引き上げる真似をする。
「本当に有難う御座います」
「はーい、そこまで。面会は終了よ。この子

も休ませてあげないと」
俺に別れの声を掛けて帰って行く。

＊

「さて、もともとここは病人、怪我人を泊める用意は無いのよ。」
「まあ、そこまで酷いわけじゃないから今日中に帰れるけど、その後どうしましょう?」
そうか。自分には全く身寄りが無かった。
「あ・・・。」
「夜に外で寝ると１００%妖怪の餌になるわよ」
「もし、どうしようも無ければ紅魔館とか、博麗神社とか守矢神社とかの人に話をしとくけど?」
「特に守矢神社には、もと人間も居るしね」
「んー。もう少し考えて良いですか?向こうの世界と全然違う環境なんで」
「えぇ。良いわよ。少し寝なさいな」
「おやすみなさい」

＊

自然と目が覚めた。
ベッドの横では永琳では無く優曇華が座っていた。
初対面の人の名前がホイホイ出てくるのは少し違和感があるが。
「具合は大丈夫ですか?溺れてから３日間起きなかったそうで・・・」
「はい。休んだら治りました・・ってマジですか!?」
「今お師匠様は出掛けているんでもう少し待っていてください」
「あ、自分の為に・・・?」
「何でも、幻想郷外の人を診察したのは初めてだったみたいで、すごい意気込んで・・・」
「やっぱり皆に迷惑を・・・」
「大丈夫ですよ。無理矢理館から出して、妖怪に食われて骨になるよりはずっとマシです」
そう話していると優曇華の耳が跳ねた。
「あ、お師匠様帰ってきた。迎えに行って来ますね」

＊

「おはよう。具合はどうかしら?」
「大丈夫です」
「そう。それは良かった」
「凄く楽しそうですが、何かあったんですか?」
「いや、貴方凄いなと思って」
「え?」
「貴方もう３回も死んでるの。不謹慎な話で悪いけど」
「一回目は向こうの世界。こっちでレミリアと咲夜に殺されて２回目、」
「え?３回って溺れたのは助かってますよね?」
「私言わなかったかしら?貴方一回死んで三途の川渡ってるの」
「え・・・?」
「それで向こうの裁判長がまだ早いって帰したの」
「それじゃ溺れ死んだと。。。」
「そうね。貴方幻想郷３位よ」
「何がですか?」
「死んだ回数」
「１位が家の姫様と竹林に住んでいる妹紅の２人それで３位が貴方」
「おめでとう。貴方は幻想郷３位よ」
永琳が拍手を送る
「いや、それ嬉しい事じゃない・・・」
「ふふふ。それもそうね」
「お師匠様!」
優曇華が部屋に入ってくる
「どうしたの?優曇華」
「館の外に妖怪が」
「どうしたの?」
「この方を迎えに来たと・・・どうしましょう?」
不安そうに聞く優曇華に対し永琳は笑って答える
「いいわ。妖怪ってリグルでしょう?なら引き受けてもらいましょう」
「良いわね?」
「はい彼女達がいいのであれば」
永琳はまた笑った

「私に彼女達の気持ちは分からないわ」

＊

「リグル・・・」
「どうしたの?帰ろ?」
「帰るって?」
「あれ?言ってなかったっけ?昨日見舞いに行く前に小町が来て、貴方が私達と住めるって許可が降りたの」
そっか。俺が溺れたのは許可が降りた後だっけ。
「そうか。よかった。お陰で妖怪に食われないで済む」
「あはは。でも私達も妖怪だよ?」
俺が空を飛べない為歩きで森を抜けようとしている。
何か糸を繋いできたと。だから迷わないと。
「ルーミアとかチルノとかは俺が溺れたの知ってるのか?」
「いや、多分レミリアに殺されたって思い込んでるわ」
「そこ止まりか。ならどうやって驚かそうか」
「んー屋台に構えとく?」
そんな事を話ながら糸を辿って帰った。
実は未だ幻想郷に来て5日しか経っていない
寝てた3日を抜くと、意識があったのは2日しかない。
こんなに密度の高い二日間は初めてだった。
帰りの途中糸が切れて道に迷った。
驚かすつもりが逆に驚かされて心臓が止まりそうになった。
まだまだ密度は高くなりそうだ。
そしてもう二度と三途の川は渡らない、飛び込まないと硬く誓った。

（終）

あとがき
初めましてMRです。初投稿です
中学の宿題の合間に書きました。締め切りギリギリです。すみません（現在15日1時30分）
この小説はこれの主人公の追悼に・・・ならんわな。
何か葬式のショックで書き始めました。
人様に見せる為に書いたのは初めてです
ー反省ー
一文目から鬱。（実話です。
何かキャラが固定できてない・・・。
オチ無い、泣けない、笑えない。
視点がころころ変わる。
日本語オカシイ。
・・・orz
ずうずうしいですが応援とかアドバイスとかくれると凄く嬉しいです。励みになります
ー宣伝ー
自分のブログでも小説垂れ流してます。
そっちのアドバイスもいただけるとありがたいです。
http://amor-yukari.at.webry.info/
→ブログです。
ありがとうございました。

東方郵便娘

～突撃、異世界からの研究者

著者：SaIka

幻想郷、蝉の盛んな夏の昼下がり。太陽は大地を、木々を容赦なく照りつける。

そんな真昼の幻想郷の人里で、今日も響く威勢のいい声。

「こんにちはー！　蟲の郵便サービスでーす！　お手紙お届けに参りました！」

赤い帽子に赤い腕章。汗だくになりながら、腕まくりのブラウスから細い腕がのぞく。手には一通の手紙。彼女の名前はリグル・ナイトバグ。この幻想郷で唯一の、手紙を取り扱う「蟲の郵便サービス」を展開している。

叩いた扉が開き、中から若い男が出てきた。リグルは手紙を渡し、にっこり微笑む。

「こんにちは、お手紙です。住所とお名前を確認してください」

手紙を渡された男は、そこに書いてある住所と名前を見る。名前が自分の妻の名前だとわかると、懐にしまってリグルに礼を告げた。

「有難う、郵便屋さん」

これが、最近の人里ではもう日常となっていた。

＊

配達を全て終えたリグルは、人里から自分の家とは反対方向に向かっていた。やがて見える古い看板。『古道具屋　香霖堂』と墨文字で書かれていた。

「いらっしゃい。帽子のスペアならそこに置いてるよ」

扉を開けると、若い男性がカウンターで座っていた。扉の音に気付いて顔を上げた彼は、リグルの姿を確認するなり用件を理解し、カウンター右手を指す。

「ありがとう、こーりんさん」

カウンター右手には、リグルが今被っている赤い帽子とまったく同じ帽子があった。それを手にとり、リグルは男性に礼を言う。

男性はこの古道具屋の店主で、森近霖之助という。人と妖怪のハーフである彼は、霊夢や魔理沙とも親しく、また同じような立場の慧音も知っていた。リグルが郵便サービスの目印として使っているこの帽子は、実は慧音が霖之助の器用さを見込んで、頼んで作ってもらったものだ。

以前の梅雨のある日、赤ん坊を人里に配達した際に野良妖怪軍団の襲撃であちこちが破けてしまい、リグルは修理に出すためにスペアの制作をお願いしていた。

「じゃあ、そっちの破れたほうの帽子をもらうよ」

「うん、よろしくね」

被っている帽子を脱いで渡し、スペアの帽子を被る。サイズはぴったりであった。

「よく似合ってるよ」

「ありがとう」
　褒められて照れるリグル。はにかみながら下を向いたちょうどその時。
　ゴゴゴゴ。
　物凄い轟音と共に地面が揺れた。
「何だ？」
　霖之助は咄嗟にカウンターの下に身を隠すが、揺れ自体は小さく店の商品にも何も被害は及んでいない。揺れがおさまって、霖之助は再びカウンターに姿を現した。
「何だったんだろ、今の……」
「あ、気をつけるんだよ」
　恐る恐る外を確認しようと扉に手をかけるリグルに、霖之助が声をかける。リグルが頷いて取っ手に手をかけた瞬間、外から扉が開いた。
「邪魔するぜ」
　入ってきたのは魔理沙、ではない。口調は確かに魔理沙でおまけに金髪金眼だが、その格好はどこぞの聖輦船の船長とも似ている。
「だ、誰だい君は？」
　思わぬ来客に霖之助は素っ頓狂な声を上げた。
「突然悪かったぜ。ここは幻想郷で間違いないか？」
　おまけに聞いてくることまで奇妙だった。一体何者かと二人が混乱しているところに、更に扉が開く。
「もう、ちゆりったら。私を置いていくことないじゃない」
　今度は全身真っ赤な女が現れた。いや、この言い方もあながち間違いではない。髪も眼も、そして服まで全て真っ赤。画家が彼女を描いたらさぞ泣くだろうと言わんばかりに赤い。
「えっと、君たちは一体誰なんだい？」
　もう一度霖之助が訊ねる。といってもさっきこの問いは金髪の少女に質問に質問で返される形でスルーされたのだが。
「あら、突然お邪魔してごめんなさいね。私は岡崎夢美、こっちは助手の北白河ちゆり。故あって魔法の研究をしているの。でも本業は学者よ」
「ついでに言うと『元』比較物理学教授だけどな」
　横から金髪の少女、ちゆりが付け足す。気に食わなかったらしく、赤女……もとい夢美が拳骨を浴びせた。
　ボカッ！　ちゆりは悶絶している！
　対して霖之助は、夢美の言っていることがいまいち分かっておらず、首を傾げている。リグルはというと完全に置いてけぼりを食らって呆然としていた。
「学者？　教授？　なんだかよく分からない言葉が並ぶが……さっきの君の問いといい、君たちは外から来たのかい？」
　流石に霖之助の頭の回転は速かった。そこで夢美は待ってましたとばかりに胸を張って、答える。
「ふふ、よくぞ聞いてくれたわね。そうよ、私達はこことは違う世界、平行世界からやってきたのよ。統一原理に当てはまらない力……そう、魔力の証明のために。一度は失敗したけれどめげたりしないわ。今度こそここの幻想郷で魔法の存在を確立して、学会のやつらにギャフンと言わせちゃうんだから！　そのためにもここ、幻想郷での調査が欠かせないわけ」
「ご主人様、話が長いぜ」
「あんたは黙ってなさい！」
　再びボカッ！　という音と共にちゆりに拳骨が下ろされた。再びちゆりが悶絶する。
「それで、ここに何の用だい？　表で大きな音がしたのも、君たちなのかい？」
「驚かせてごめんなさいね。ここが一番近かったから……。どうやら幻想郷で合っているみたいだし。あなた、博麗神社ってご存知？」
　夢美の口から意外な単語が飛び出す。博麗神社といえば霖之助だけでなく、リグルだって良く知っている。いつだかの永い月夜の晩に自分を撃ち落とした巫女のいる神社で、宴会でよく遊びに行くし、いつぞや出会った祟り神（自称）も博麗神社に縁がある存在だと言っていた。それが、外の世界から来た人間の口から飛び出すのは予想外だった。
「霊夢のこと、知ってるの？」
　つい興味が湧き、リグルは口を挟んだ。
「ええ、前にここに来たときにお世話になったの。る～ことは元気かしらね。あの巫女に

会えば、どうにかなると思ったのだけれど」
「これは驚いたな。幻想郷に二度も、しかも自力で辿り着く人がいるとはね」
　霖之助の言うことも最もだ。結界で隔離されているこの幻想郷には、普通であれば辿り着くことはできない。どころか外の者がその存在を知ることすら普通はないのだ。
「お褒めにあずかり光栄ですわ。それよりもそこの子、霊夢を知ってるようね。案内させてもらえないかしら?」
　夢美が目をつけたのはリグルだった。いや、実際のところ霖之助も霊夢とは親しいので神社に案内はできる。しかし、一応（本当に一応、というほど閑散としているが）開店中の店の店主が抜けるわけもいかないので、仕事あがりのリグルが案内をすることになった。

＊

　夢美は博麗神社を訪れると、庭で掃除中だった霊夢に滞在許可と宿の手配を取り付け、ついでに「魔法」を使える人物とその居所までを教えてもらっていた。霊夢を知っていたのはどうやら本当だったらしく、霊夢は夢美が挨拶をした時に僅かに嫌そうな顔をしていた。そういえば霊夢ってあんなに親切丁寧だっけ、と少し疑問にも思ったリグルだったが、気まぐれだろうとその時は気にかけなかった。
　もっとも、それは後に思い知るのだが。
「ねぇねぇ」
　どうやら自分の役目は終わったと、リグルが神社を後にしようと思ったちょうどその時、夢美から声を掛けられた。
「なに?」
「あなたの帽子のそのマークって、郵便のマークでしょ? 私達の世界じゃもうほとんど使われてないけど、もしかして幻想郷には郵便局とかアナログ手紙とかあったりするのかしら」
　一瞬、わけがわからずぽかんとするリグル。
「郵便サービスなら私のお仕事だよ。夢美だっけ、あなたの世界にもあったりするの?」
「さっきも言ったようにもう流行らないサービスだけれどね。電子メールが主流だもの。へぇ……郵便を、しかも妖怪が……面白そうね、素敵!」
　夢美は何やらリグルの郵便サービスに興味を持ったらしく、リグルを見てうっとりとしている。あまりにもうっとりしすぎていて、リグルが引き気味になる程度だった。
「ごーしゅーじーん。リグルがヒイてるぜ。素敵なのは分かったから落ちついてやれよ」
　呆れたちゆりのツッコミが、リグルにとっての救いであった。
「私もやってみたいわね」
　そしてこの一言である。
「やってみたいって言われても……そんなに忙しい仕事じゃないし」
「そうだぜ。それにあんたは何のためにここに来てるんだよ。目的も果たさないで寄り道してる場合じゃないだろ」
「うう、ちゆりの意地悪ぅ……。分かったわよ、諦めるから」

＊

「……って、言ったはずなのに」
　昨日のことを思い出して嘆息するリグル。その隣には、薄緑の髪を揺らしてにこにこ笑うメイド……のロボット。名をる～こという。
『やっぱり私も何かしたいわ。でも魔法の調査で忙しいし……だから、博麗神社に貸し出していたメイドロボットに代役を頼むわ。大丈夫、この子優秀だから』
　仕事のために人里にきたリグルを待ち伏せ

ていた夢美からそう言われて押し付けられたのがこれだ。いや、リグルも押し付けられた当初はむしろ有難いと思ったのだ。少ない仕事とはいえ半分に減るならそれは嬉しいから。元々、紅い館のメイドしか知らないリグルにとってメイドといえば完璧で瀟洒で与えられた仕事をきっちりこなすイメージしかなかったのもある。
　それが全て、誤算だったから今彼女はため息を吐いているのだが。
　つまり——しかもリグルの思った以上どころの話ではなく、る～ことは仕事をしなかったのだ。どころか、配達先をことごとく間違えて住民に迷惑をかけ、その後始末にリグルが頭を下げに回る始末。その上再配達する羽目になり、いつも気楽に手短に終わっていた仕事が倍以上に膨れ上がったのだ。
　夢美があの場で本当に諦めていてくれたら、と、この場に居ない人物に向かって虚しい恨み言がリグルの心の中で反響して消えた。

＊

　夢美は命蓮寺の近くにいた。寺の尼僧である魔法使い、聖白蓮に会った帰り道だという。リグルが配達（再配達含む）を終えて、霊夢に夢美の行き先を聞いてこちらに向かったことを考えたらかなり長居していたようだ。夢美の研究者魂は本物らしい。
　リグルは借りていたる～ことを夢美に返し、ついでに苦情という名のノシも少しおまけした。
「借りてたこれ、全然役に立ってくれなかったじゃない。逆に仕事が増えて大変だったんだから」
「う」
「ご主人……」
　てっきり礼を言われるとでも思っていたのであろう夢美は項垂れ、横からちゆりの白けた視線が彼女に突き刺さる。
「別に悪気がないし、そこまで怒ってないからいいよ」
「いや、でも邪魔するほうが悪いんだぜ、こういう場合」
　ちゆりのこの一言を聞いて、リグルはなんでこの人のほうが助手なんだろうと疑問に思うのだった。
「何かお詫びをしなくちゃ……そうだ、昔やんちゃな魔法使いにあげたものと同じＩＣＢＭがあるんだけど、それを貸してあげるわ。武器として使ってもいいし、超高速での空の旅も楽しめる優れものよ」
　あいしーびーえむとやらがリグルには全く理解できない上にる～ことという前例があるのでいまいち信用に値しない言葉ではあったが、夢美本人に悪気がないことは明らかであるし、幻想郷に二度来れるほどの外来人が、二度も不良品を寄越すわけがない。リグルは今度こそと、夢美の提案を受け入れた。

＊

「ま、ミミちゃんは武器として使いさえしなければ大丈夫だしな。走り方と止め方さえ教えておけば大丈夫だろ」
　夢美は保管していたＩＣＢＭ——名前はミミちゃんという——のうちの一つをリグルに貸し出し、あらかたの操作方法を教えた。今しがたリグルはミミちゃんに乗って走り出したところで、ちゆりがその後姿を見送りながら呟いたところだ。
　しかし、横の夢美は今のちゆりの言葉になにか引っ掛かったのか、しまった、という顔をしている。
「御主人？」
「止め方……教えてなかったわ」
　ボカッボカッ！
「パイプ椅子はいーたーいー」

＊

「たすけてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

白昼の妖怪の山、その山麓の野道の上空を、物凄い速さで未確認飛行物体とおぼしきものが駆け抜ける。その飛行物体にはよくは見えないが、絶叫を振り撒く誰かが乗っている。声から察するに少女だろう。

リグル・ナイトバグが走り方だけ教わって止め方を聞いてなかったことに気付いたのは、景色がわからないくらいにミミちゃんがスピードを上げてからだった。

どうしていいか分からないパニック状態のリグルが冷静に止め方を考えられるわけがなく、振り落とされまいと必死にしがみつくだけで何もできていない。一体ここはどこだろうと景色を見ようとしたその時、その視界、まさに猛スピードで迫らんというところに、地面があった。どうやら下を向いたせいでどんどん高度が落ちていったらしい。

「——っ！」

防衛本能とも言うべきか、リグルはほぼ無意識に、ミミちゃんを真上に向ける。だがそこで、上方への急カーブ、しかもカーブ後の勢い盛んな急旋回によって、リグルは遂に振り落とされてしまった。

「ぎゃいん！」

幸い地面が草地で衝撃が吸収されたため、リグルは軽いダメージ程度の落下で済んでいた。僅かに痛む体を抑えて、立ち上がる。ミミちゃんは一体どこだ——

「あ」

ちょうど彼女がその姿をとらえた時、ミミちゃんは妖怪の山の中へと突っ込んでいっていた。

リグルの額に冷や汗が流れる。更に、そんな彼女への追い討ちか、後ろからカシャリと独特の音がした。リグルはこの音を知っている。カメラのシャッター音だ。妖怪の山で、泣きっ面に蜂だろうが容赦なくカメラを向ける人物といえば、一人しかいない。

「げぇ、天狗ぅ……」

「おっとこれは失礼。あまり撮られて欲しくなかったでしょうか？　蛍の妖怪のあなたが未確認飛行物体から振り落とされて、見事に落下するなんて面白いネタだと思いますけど」

「当たり前のこと言わないでよ！　もう……ミミちゃんは落ちるし、天狗に見つかるし……もう最悪」

確認するまでもないがしかし、そこに射命丸文の姿を確認して、リグルは更に落ち込む。

ミミちゃんが落ちた妖怪の山は、天狗社会と守矢の神社が取り仕切る神聖な領域。騒ぎなど起こそうものなら、リグルのような弱小妖怪など目にも留めない強さの天狗達に囲まれて詰問されるに違いないのだ。そしてよりにもよってその天狗の一人に、しかも情報の扱いに長けている新聞記者に見つかってしまった。リグルに逃げ場など無かった。

「あ、今から話すことは独り言だと思って下さいね。……実は天狗の上の方々は皆会議で集会所に集まっているんですよね。哨戒天狗たちもあの辺りは河童の領域なので問題を起こしたがりませんし。あーでも、郵便サービスについて詳しく取材する機会が無かったので、一度取材してみたかったのですよ。でも今使ってるカメラは代用品であまり使いたくないですし……カメラが直ったら取材しましょうか、ええ。さて、もしリグルさんが取材に応じてくれるのであれば今日の夕方まで哨戒天狗の一人を使って見回りを止められなくもないんですけどねー……。あ、独り言ですよ？」

独り言なのだろうか、とリグルは真に受けつつも文が自分に珍しく親切を働いてくれているのだと理解する。取材という対価はあるが、多少のしつこさがあるだけで天狗に囲まれるよりはまだ苦にならないはずだ。

「有難うございます！」

リグルは不敵に笑う文に礼を告げ、妖怪の山へ飛び込んで行った。

＊

日が高いうちの妖怪の山は、蒸し暑さと虫の活発な動きを避けて滅多に人（むしろ妖怪）が通らない。一応文には口止めをしてもらってはいるが、人気の無さも手伝ってミミちゃんの不時着は騒がれるどころか気付かれることもなかったようだ。

……と、リグルは思っていた。

「うう……ミミちゃん、どこだよう……」

針葉樹が並ぶ山間の道を、低空飛行で飛んでいく。墜落した場所を推測しながら向かっているが、木々が邪魔で方向感覚もしどろもどろだ。太陽を指針にするという発想に至らないあたりが、リグルの頭の足りなさを物語っている。

ブラウスが汗でべっとりと貼り付いて不快感を覚える。日光はかなり遮られており空気は、暑くは無いが森林特有の湿気を帯びて蒸すようだった。体力が奪われ、体内の水分が汗となって流れていく。リグルは予定を変更し、ミミちゃんの発見よりもまずは水を欲した。

しばらく飛ぶと、ひんやりとした空気を頬に感じた。川が近い。リグルはその空気を追って更に進んでいく。やがて、強い光が向こうから差し込んでくるのが見えてきた。

森が開ける。緩やかで涼しげな音を立てて、水が流れている光景がリグルの目に映った。

「やったぁー！」

帽子が脱げるのも気にせず、もうそれは本能的だということも気にせず、服を着たままというのか、欲望に忠実に、吸い寄せられるかのように、鉄砲魚が水面に戻るがごとくの勢いでリグルは川に飛び込んだ。

汗で貼り付いていたブラウスが流れる水によって剥がされ、ふわりと水中で揺れる。冷たすぎるくらいの山の水だが、リグルにとってはむしろ心地好いくらいだ。水中でゆっくりと目を開けるとそこには、川魚が連れ踊るように優雅に泳いでいた。

じんわりと水中の低温に全身が満たされるまで十分に身を潜め、そして川底を蹴る。急速に光と温度が世界に満ち、身体が酸素に触れる。

「ぷはぁ！」

「ひゅい！」

リグルの一息とその悲鳴（らしからぬ悲鳴）は、ほぼ同時に森に響いた。

「ぴ、ぴぴぴびっくりしたぁ……」

川岸には、空色のゆったりめのワンピースに青いツインテール、緑の帽子にリグルの郵便帽を乗せた少女がいた。目をまん丸に見開き、腰を抜かしたのか、座り込んだ体勢でリグルを見ている。リグルは少女をどこかで見たような、と記憶を探った。少女もリグルに見覚えがあるらしく、しばらく上の空で何かぶつぶつと呟く。

「あっ！」

またもや同時に声が上がった。お互いに指をさすタイミングまで同じである。

「博麗神社の宴会で見た、魔理沙の友達だ！」

「神社の宴会で見かけたね。氷の妖精や夜雀たちと一緒にいる蛍の妖怪だろう？」

博麗神社の宴会といえば、霊夢や魔理沙、あるいは彼女の友人に誘われた者なら人妖問わず参加できるということで、そこで知り合う者や、姿を記憶にとどめる者も多い。特に魔理沙ときたら誰彼構わず声をかけるので、リグルも魔理沙から誘われたチルノを通じて宴会に加わるようになった。その魔理沙の横によくいるのが紅魔館の動かない大図書館パチュリーや森の七色人形遣いアリス、そして今リグルの目の前にいる少女、

「……えっと」

リグルの記憶から名前が出てこない。

「河城にとりだよ。にとりって呼んでね。魔理沙の知り合いなら大丈夫、歓迎するよ」

「知り合いってほど知り合いじゃないけど……ま、いっか。私はリグル。リグル・ナイトバグだよ」

今でこそリグルと魔理沙とは宴会や道端で出会うと話をする仲だが、そもそも出会った時ときたら蛍狩りと称してボッコボコにされたものだ。思い出して苦笑いがこみ上げる。

「あ、帽子……ありがとう」

リグルはにとりの緑色の帽子の上にさらに

被せられた自分の帽子を受け取った。丁寧に穴から触角を通して被りなおす。郵便サービスの配達員が出来上がった。
「人里で新しいサービスが始まったって天狗の新聞で読んだけれど、なるほど君だったんだね。へぇ、面白いや」
　にとりは興味深そうに帽子や腕章を見遣る。まじまじと眺められてリグルは恥ずかしそうに目を逸らした。ちょうどその視界に、ほんの僅か、森の色に不釣合いな色合いが入ってくる。
「あれ？」
「どうしたの？」
「うん、あっちに何かあるなって」
　リグルが指さす先には、背の低い木の茂みの隙間から覗く白い色。
「見てみよう」
　川を飛んで渡り、茂みのほうに二人は向かう。木をかき分けてみればそこには、つるつるとした鋼鉄の白いボディ。それは紛れも無くリグルが探していたものだった。
「ミミちゃん！」
　歓喜の声。急いで枝を跳ね除けたが、その頭は完全に地面にめり込んで、いやむしろ埋まっていた。あんなスピードで落下すれば当然ではある。
「うーん、これは大変なことになっちゃったね。よし、私も手伝うから、一緒に引っ張り出してあげよう！」
　服の袖をまくりながらそう言うと、にとりはリグルの反対側にまわり込んだ。リグルもミミちゃんのボディに手をかける。
「いくよ……せーの！」
「えいっ！」
　二人同時に、ミミちゃんを持ち上げるようにして引っ張る。しかし、二人がどれだけ顔を真っ赤にしてもミミちゃんはびくともしなかった。
「思ったより深く刺さってるみたいだね。どうしようか……そうだ」
　何か思いついたらしいにとりは、手をぽん、と叩く。
「ちょっくら水の力で地面をやわらかくしてあげようか。ちょうど川も近いしね」
　得意げな顔で、川へと向き直るにとり。
「そぉい！」
　軽やかなにとりの掛け声と共に、川の水が舞い踊る。無重力空間に漂うかのように軽々と空中に漂った水が、にとりに操られてミミちゃんの刺さった地面へと降り注ぐ。そして流石のにとり、二人が立つ位置の地面だけは足を滑らせないように器用に乾いたまま残していた。
「それじゃあ、もう一回」
「いくよ……せーのっ！」
　ぐい、と両腕に渾身の力を込めてミミちゃんを上に上にと引っ張る。水を含んだ地面は緩くなり、二人の力に負けて徐々にミミちゃんの頭部を手放していく……そして。
「ひゃぁ」
「うわぁ！」
　めり込んでいた赤っ鼻の頭部が姿を現し、余分な力の勢い余ってリグルとにとりが尻餅をついた。べちゃりと嫌な音がしてリグルが下を向けば、泥んこ地面に思い切り尻をついて座っているではないか。
「あーあ、泥まみれ……」
「ちょっと撒きすぎちゃったかな？　ごめんね」
　にとりがそう言って立ち上がる。服の無事を確認しようと振り向いたそこで、立派な泥模様が見える。
「あっちゃー……参ったね、こりゃ」
「うわぁ……って私も！？」
　お互い尻に泥模様を見せた状態である。
「ぷっ……あははは！　こんなみっともない格好になっちゃうなんて恥ずかしいや」
「やだもう、へんなの！　せっかく川に飛び込んだのに、また入らなくちゃいけないじゃない」
　あまりにも滑稽だったもので、こらえきれずに二人とも吹き出した。

＊

　ミミちゃんを川岸まで運んだ後、二人は服

の泥汚れを落とそうと川へ飛び込んだ。十分に泥汚れを落とし、リグルは川岸の岩場に上がりこんで服を乾かしている。
　にとりはというと、ミミちゃんに興味を持ったらしくさっきから色々と調べている。機械いじりが好きらしく「エンジニアの血が騒ぐってものだよ」と目を輝かせていた。
「ふぅん……やっぱり外からじゃわからないね。カラクリの類だとは思うんだけど、河童内でも見たことないね。一体どこで手に入れたんだい？　もしかして魔理沙の得意先の古道具屋ってやつ？」
「ううん、それは外からきた変な人間が持ってきたの。夢美っていうんだけど、なんか見たことも無いようなものばかり持ってたんだ。全部自分で作ったって自慢してたよ」
　そのリグルの言葉を聞いて、にとりの目が丸くなる。
「外からきた人間？　まさか、盟友がこんなすごいものを作ってもってきたっていうの？
　ひゃぁ、外って凄いんだね……是非とも、このカラクリについて色々うかがってみたいものだね」
　元より、河童は臆病ではあるが人間が好きな妖怪であり、にとりもそれに他ならない。機械に詳しい人間、しかも珍しい機械を自分で作れるというのだ。それに対してにとりが興味を持たないわけがなかった。
「うーん、夢美もなんか妖怪とか魔法とか色々知りたがってたから、もしかしたら会ってくれるかも。どうする？」
「え、えっと……。うーん、どうしようかな。いざ会ってみてもうまく話せるかちょっと不安だなぁ。外から来たって言うし、とって食いやしないよね？」
　本気で言ったつもりがなかったのか、叶うとは思っていなかったのか、いざ会えると聞くや否やにとりは頭を抱え始めた。初対面の人間と妖怪がマニアックな話にいきなり浸ろうなんて確かに無理難題と言えなくも無い。魔理沙ほどフレンドリーで誰とでも打ち解けるなら別だが、にとりはどちらかといえば話下手なほうだ。
　尻込みするにとりに、リグルは川岸の荷物から一枚の紙と羽ペンを取り出した。
「じゃ、じゃあ、手紙とか書いてみたらどうかな？　あ、いや私のお仕事で専門？　いやそういうわけじゃないけど、とにかく言いたいことが言えない時に使えるって慧音先生も言ってたから……」
　おずおずと差し出された紙とペンを、にとりは躊躇いがちに受け取った。まだ決心がついてないようだ。
「あ、いや……その、別に無理して書かなくてもいいんだけど。良かったらどうぞ！」
　自分の仕事にかこつけて押し売りをしてしまったのでは、といった不安がリグルの頭をよぎる。別に夢美が会いたがってるわけでもなし、ここでにとりに無理に動かせるわけにもいかない。
　不安な気持ちを孕んだ沈黙が続き、にとりはしばし逡巡する。しばらく悩みに悩んだ後、リグルを向き直って、
「うん、折角のチャンスだし、やってみようかな」
　結論が出た。
　手紙を書きたいということでにとりは工房にリグルを呼んだ。機械にさす油のにおいが鼻をつく。にとりの可愛らしい外見に見合わない、ごつごつした雰囲気が工房にはあった。
　パースや螺子や工具が散らばった机の上を軽くはけ、手紙の作成に取り掛かる。それをただ眺めているだけのリグルの横で、ミミちゃんがきゅ～ん、と鳴いた。心なしか退屈そうな声だった。
　機械類や工具だらけの工房で、羽ペンが動くのはなんとも不似合いな光景である。まして妖怪にあまり手紙の文化は浸透しておらず、にとりもまた然り。手紙の文章が上手く浮かばずにうんうん唸りながら苦戦していた。
「こんにちは～」
　そこに、ノック音に続いて涼しげな声が割って入る。羽団扇で仰ぎながら入ってきたのは文だった。
「にとりさん、修理に出していたカメラ、いつ頃戻りそうですか……あややや？　リグルさんじゃないですか。どうしてここに？」
「え、あ、ちょっともろもろの事情があって

ここに……文さんは？」
「先程言った通りですよ。先日の取材でいつものカメラがちょっと壊れてしまっていましてね、にとりさんに修理を依頼していたのです。リグルさんに取材の約束を取り付けたので、仕上がりの予定を聞いておこうと思ってまして。ところでにとりさんは今何を？」
　机に向かって唸るにとりを見て文は首を傾げる。
「人を呼びたいから、手紙を書いてるんだけど……あの様子じゃしばらくかかりそうだね」
「珍しいこともあるものですねぇ、これはネタの価値が……いやあの冗談ですってリグルさん、そんなに怖い顔しないで下さい……」
　必死に手紙を書くにとりの邪魔になると思ったリグルは文を思い切り睨む。さすがに冗談に凄まれては文もそれ以上はできなかった。
「うーん、機械は専門だけど文書はさっぱりだねぇ、何を書けばいいか分からないよ」
　見れば、にとりのペンは全く進んで居ない。机には没になった便箋がクシャクシャに丸められて散乱していた。
「文書ですか？　それなら私の出番でしょう。風の噂より疾い天狗のブン屋をなめてかかっては困りますね」
　待ってましたと一歩前、文は胸を反らして躍り出た。
　確かに、文は長年幻想郷で（情報の信憑性はともかく）新聞を書き続けているので、文書の作成には詳しいはずだ。しかも彼女が所属するは礼節と上下を重んじる天狗社会。となると手紙の書き方にも通ずるではないか。
　先刻の冗談があってリグルは若干疑ってはいたが、自分も扱いこそすれ、手紙を書く機会を持たない身、アドバイスなど到底無理なので、何だかんだ言ってもここは文に任せるしかなかった。
「ではですね、えーっと……まぁ初対面ですし、キャラを出すよりはまず相手に失礼のないことを重視するべきでしょうね……」
　またもリグルは眺めているだけの時間が流れる。ふとミミちゃんを見ると目を閉じているではないか。る～こともそれなりに感情豊かだったが、これが人間の手で作られたとは、現物を目にしていてもやはりにわかには信じがたいものがあった。
「それにしても……」
　リグルは、熱心ににとりに文書の書き方を教える文を見る。
　普段はガセ記者だとかお断りだとか、いいイメージは持たれないが、意外といい所があるのかも知れない。そういえば自分みたいな妖怪でも敬語（本人はビジネス口調と言っていたが）は欠かさないし、礼節がある人物なのだろう。とリグルはそんなことを考えていた。
　文が訪れてからものの数十分で、手紙は完成してしまった。文が文章をまじまじと眺めて推敲し、ゴーサインを出す。
「……ふぅ、緊張したぁ」
　それまで体を強張らせて推敲を見守っていたにとりは、文のゴーサインを見てほっと胸を撫で下ろし姿勢をほぐした。
「あとはこれを出すだけだね。頼んだよ、手紙屋さん」
　期待半分緊張半分、震えるにとりの手からリグルは手紙を受け取る。
「はい、あて先は岡崎夢美。郵便物一通……確かに受け取りました！」
　慧音から教わった業務用の決め台詞で、リグルはそれを受け取った。
　目指すは異世界からの研究者。それが素晴らしい出会いとなるのか、はたまたる～ことやミミちゃん絡みどころではないアクシデントとなるのか……まだその時は分からなかった。

《前編　おわり》

◆後書き

二〇一〇年八月十六日午前零時四十七分。これを書き終わった時間です。毎度のこと遅刻するのはどうにかかならないものか……。

言い訳するとパソコンがどうもスロースタートで調子が上がらないみたいなんですよ（このネタ分かる人いるんですか……）。起動だけならまだしもメモリ読み込みに時間がかかる、ワード起動に時間がかかる、ファイル読み込みに時間がかかる。おおよそこれだけでラグが十五分。更にエラーやメモリ負荷計算やらで数回失敗して三十分。

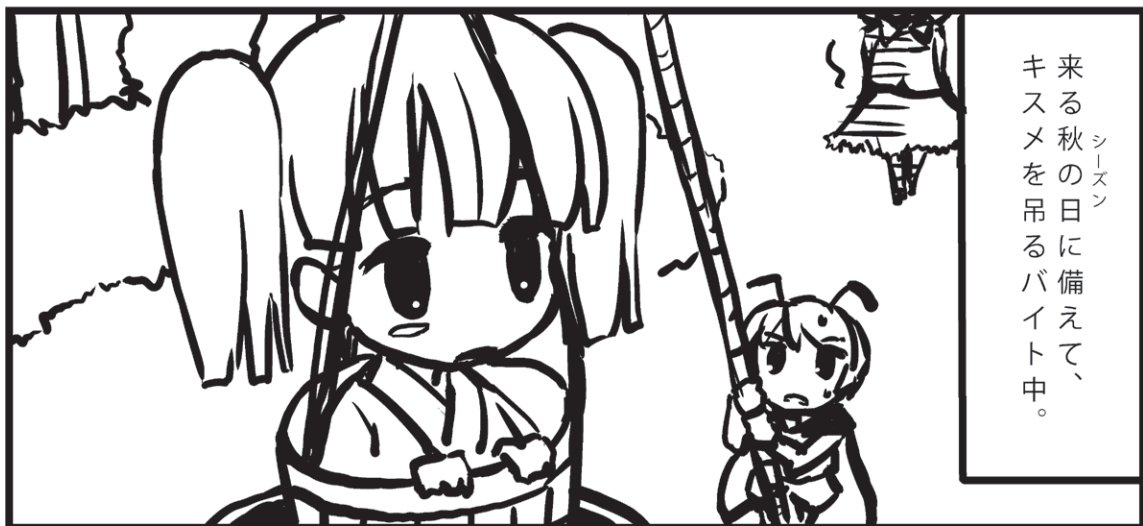
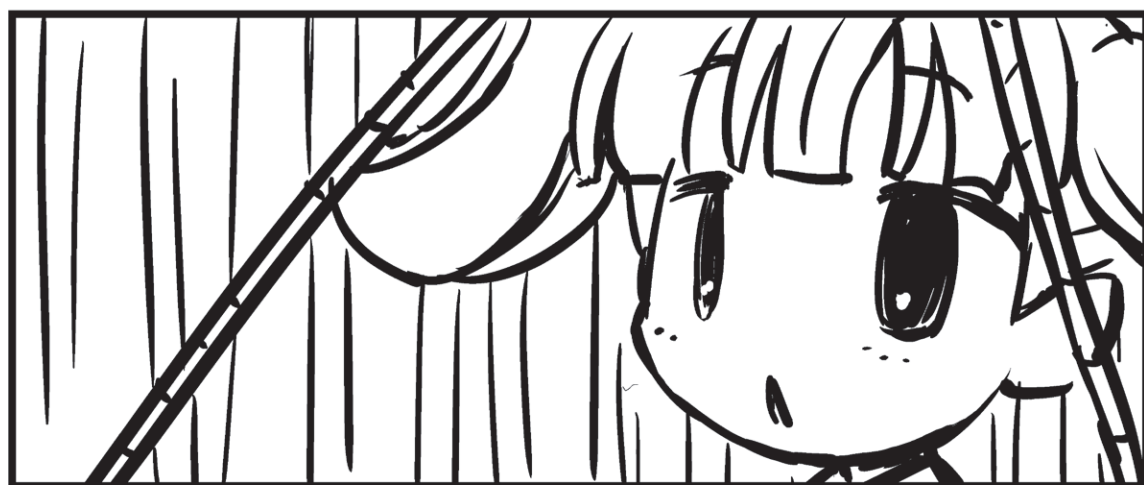
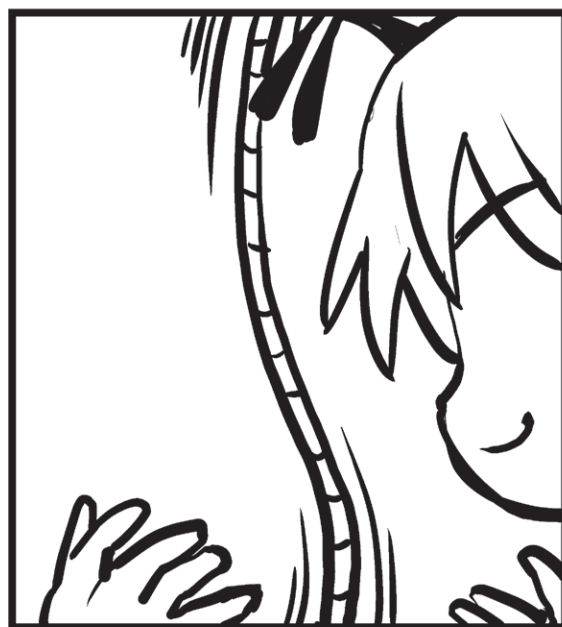
その前に締め切り直前で追い込みをかけるのをやめろとあれほど（ｒｙ

今回は「～頑張れ、妖怪娘」に続いてギャグパートです。一応ギャグ。何がというと主に教授の存在がギャグ。
突然外界からやってきた夢美とちゆりは魅魔と同じく旧作、「東方夢時空」のキャラです。花映塚と同じ形式ですので、ちゆりは小町、夢美が映姫のポジションなんですけどね。実際けっこうツッコミ所満載のいいキャラです。可愛いですよ教授。そういえば夢オチの時の絵で主役はってましたね。赤毛の苺娘。る～ことやミミちゃんももちろん夢時空から。霊夢や魔理沙にあげたのも本当です（各ＥＤ参照）。
　あとにとりですが、初期プロットではいなかったのにいきなり出演が決定しました。まぁ後輩の友人がにとり好きだったのに影響されたのもあるんですが。文はもっと後です。にとりのキャラと口調がいまいちつかめてなくて申し訳ないです。一応推敲はしてもらってるからこれでいいのかな……。あと文がキャラ崩壊とか言わないでね。

　で、前編になっちゃったんですが後編投稿できるかどうか……残りの夏休みを職員受験とイベ原稿に捧げるつもりなので、これが原稿の一つとはいえ厳しいかも知れません。もし「後編は本で買って読んでね☆」なんてことになったらごめんなさい（別にそこまでしなくていいとは思いますけど）。

あなうめG漫画（※ゴキブリの意味でなく）　小崎

終

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

宵闇に紛れて踊る
イリイチ　p2

夏の夜の散歩に飛び出す様子を描こうと思って・・・・
二人はきっと誰よりも楽しみ方を知っている。

リグル紅魔を行く
preludenano　p42～p43

美鈴：「わからないです（ベチャ）なんで私がこんな目に遭っているのか；；（ベチャ）」

フラワーマスター様に叱られるから
Step　p4～p9

リグルのお姉さんキャラは幽香さんかなぁ、という事で。
一応つづきます

ほたりぐる～東方紅魔郷～
怒羅悪　p44～p45

こんばんわ、どらおです。
今回時間が無く色塗りが満足に行えてません・・・
別の場でちゃんと塗り直したバージョンをアップするかもです。
では、失礼しました。

無題
草加あおい　p10～p11

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…いつき会長があまりにも可愛いので…リグルさん好きの皆様ならきっとわかっていただけるのでは…幽香さんバージョンを描くのはは…止めておいたほうがいいですよねw

パチュリグな日々～バレンタイン編～
東　p46～p53

テーマが東方紅魔郷とゆうことなんで久々にパチュリグで描こうと思ったんですが、夏コミ前とゆうことで時間がなくて、結局今回も同人誌の原稿ですwだから季節はずれすぎるけど気にしないでね！

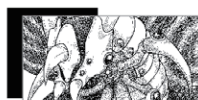
リグると！
ひどぅん　p30

リグルとみんなの初対面エピソードって気になるよね！

Summer in a pot
角右衛門秋水/けーこーとー　p54～p58

はじめまして、けーこーとーといいます。アレ？お前漫画描いてないのになんで投稿してるの？話を書いたから・・・・え？秋水さんに無理やり？　とりあえず今後もお見知りおきを！

とーほーこうまきょう
言示弄　p31～p34

ちょっとなんか簡単に描けるようなのを描きたかったので描いてみた。タイトルを言う咲夜が気の抜けた感じで結構良く描けた気がするけどその後結構普通な感じな線、内容になってしまったのが心残り

蛍の現象学
羅外　p59

究極完全態グレートモスは僕らのロマン。

東方茶湾虫
クロツク　p35～p37

だんだんリグルが蛍ってことを忘れそうです。

縁側涼しいね
残虐非道の貴公子　p83

絵柄を変えて挑戦。気づけばレイヤー数が128になってました。

紅魔抄
キッカ　p38～p41

紅魔郷のときのお話。描いてみて……修行が足りませんな。

表紙
小崎

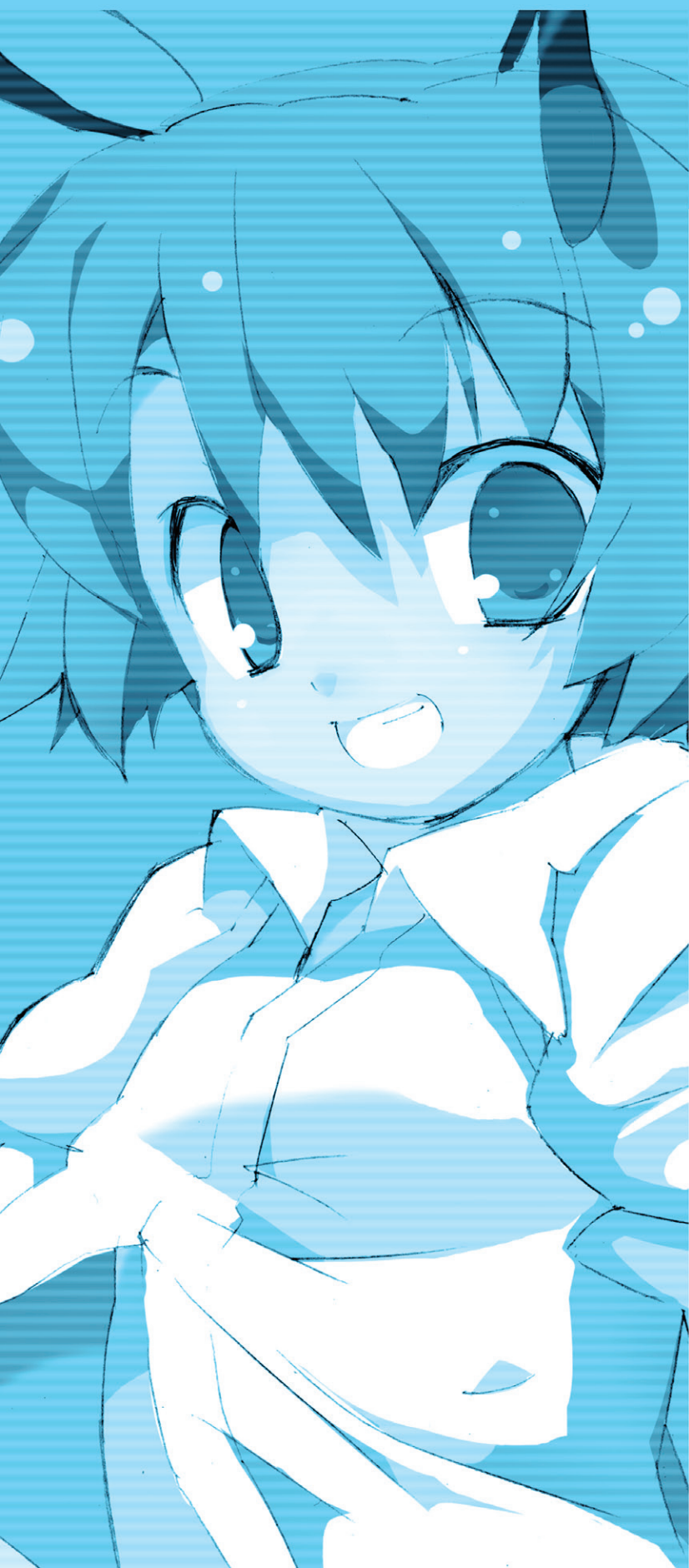
「夏色」という言葉から、どんな色を思い浮かべますか。
私はおむつのCMで使われる青い水の色をイメージします。
そんな「夏色」リグル。

NEXT▶ 次号10月号は9月22日（水）発行予定！

※次号の投稿締切は９月15日(水)です。
皆様からの投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG　2010年9月号

2010年8月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画
web配布／自由投稿参加型月刊誌

mimidori
ＭＲ
Salka
くろと
中国
悠奈
イリイチ
残虐非道の貴公子
Step
角右衛門秋水
けーこーとー
草加あおい
羅外
モフパカ
やにたま
貴キ
蛍光流動
豆板醤
preludenano
キッカ
クロツク
ひどぅん
言示弄
怒羅悪
東
小崎